

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二四年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十三巻第四号（通巻七四六号）

4月号・2024年

お知らせ

昨年三月より再開させて頂きました本部月例会ですが、新型コロナウイルスは衰えず、現在第十波とかいわれております。公共交通機関や街中においてのマスク着用は確かに減っておりますが、それが逆に高い感染力を維持させているのかもしれない。

再開したものの出席者数が著しく減って、一年間様子を見ましたが以前のような数に戻りません。皆様の声を集めますと、まず第一に、まだまだコロナウイルス感染が怖いので外出を控えたいが多いようです。さらに三年間休止中に、肉体的な衰えが増して気軽に散歩できなくなった、も多く聞かれました。事実編集部の中でも、コロナ感染者が複数出ており、また何となく体調不良を覚え欠席を余儀なくする場合もありました。

そこで、まだ再開は時期尚早であったと判断し、なおしばらく、小誌での「月例会」の休止を決めました。月例会に変わる効果的な誌上企画を考え、例会ロスのマイナス感を埋めたいと考えます。ご理解とご協力を、お願い申し上げます。

《冬雷短歌会》

4月号 目次

DTPで「冬雷」を作る—組版のすべて—(6).....	〈冬雷編集室〉… 1
冬雷集.....	9
作品一.....	24
四月集.....	40
残響集.....	46
作品二.....	56
作品三.....	70
二月号冬雷集評.....	山本三男… 23
二月号作品一評.....	小林芳枝・藤田夏見… 38
二月集 / 残響集評.....	ブレイクあずさ… 45
『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(2).....	大山敏夫… 48
二月号作品二評.....	井上莖子・江波戸愛子… 54
二月号十首選 (作品一・作品二・作品三)	65
二月号十首選 (冬雷集・二月集 / 残響集)	66
島木赤彦の一首鑑賞 2	桜井美保子… 67
二月号作品三評.....	桜井美保子・橘 美千代… 68
歌集・歌書紹介.....	佐藤靖子… 76

DTPで「冬雷」を作る(6)

組版のすべて

《冬雷編集室》

本稿の(4)でレイヤーについて少し触れたが、読者から、レイヤーって本文の中では使わないのですか？ また、使うことがあるとしたらどんな場合でしょうか？

という質問を受けた。今回は先ずこの質問に答えたい。DT
P組版でのレイヤーは前にも書いたように「透明フィルムを一枚
複数枚重ねて」それぞれ別個に作業を進め、最終的には一枚
の平面の誌面のように作る機能である。

実は「冬雷」でも幾度かレイヤー誌面を作ったことがあった。それは冬雷大会の詠草とその批評（一行30字で指定した）を纏めた特集号であり、このページを制作するにあたり、与えられた原稿類を並べながら、熟考し、レイヤーを使うしかないと思いついた。

ここ四年間の「冬雷」は「誌上大会」形式が定着しているが、あのように特集記事がレイヤー不要で簡単に纏められるのは、原稿作りの段階で諸氏の詠草と、その短評が一つに纏

めて編集されていたからである。以前は「詠草」と「短評」は別個の原稿として纏められており、当時は他にも幾つかの関連記事があつて、こちらも別に編集されていたのだ。

当時の大会記事特集誌面見本が左の画像である。細かくて

- | | |
|-----|-----|---|
| 37 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 | 103 | 104 | 105 | 106 | 107 | 108 | 109 | 110 | 111 | 112 | 113 | 114 | 115 | 116 | 117 | 118 | 119 | 120 | 121 | 122 | 123 | 124 | 125 | 126 | 127 | 128 | 129 | 130 | 131 | 132 | 133 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | 140 | 141 | 142 | 143 | 144 | 145 | 146 | 147 | 148 | 149 | 150 | 151 | 152 | 153 | 154 | 155 | 156 | 157 | 158 | 159 | 160 | 161 | 162 | 163 | 164 | 165 | 166 | 167 | 168 | 169 | 170 | 171 | 172 | 173 | 174 | 175 | 176 | 177 | 178 | 179 | 180 | 181 | 182 | 183 | 184 | 185 | 186 | 187 | 188 | 189 | 190 | 191 | 192 | 193 | 194 | 195 | 196 | 197 | 198 | 199 | 200 | 201 | 202 | 203 | 204 | 205 | 206 | 207 | 208 | 209 | 210 | 211 | 212 | 213 | 214 | 215 | 216 | 217 | 218 | 219 | 220 | 221 | 222 | 223 | 224 | 225 | 226 | 227 | 228 | 229 | 230 | 231 | 232 | 233 | 234 | 235 | 236 | 237 | 238 | 239 | 240 | 241 | 242 | 243 | 244 | 245 | 246 | 247 | 248 | 249 | 250 | 251 | 252 | 253 | 254 | 255 | 256 | 257 | 258 | 259 | 260 | 261 | 262 | 263 | 264 | 265 | 266 | 267 | 268 | 269 | 270 | 271 | 272 | 273 | 274 | 275 | 276 | 277 | 278 | 279 | 280 | 281 | 282 | 283 | 284 | 285 | 286 | 287 | 288 | 289 | 290 | 291 | 292 | 293 | 294 | 295 | 296 | 297 | 298 | 299 | 300 | 301 | 302 | 303 | 304 | 305 | 306 | 307 | 308 | 309 | 310 | 311 | 312 | 313 | 314 | 315 | 316 | 317 | 318 | 319 | 320 | 321 | 322 | 323 | 324 | 325 | 326 | 327 | 328 | 329 | 330 | 331 | 332 | 333 | 334 | 335 | 336 | 337 | 338 | 339 | 340 | 341 | 342 | 343 | 344 | 345 | 346 | 347 | 348 | 349 | 350 | 351 | 352 | 353 | 354 | 355 | 356 | 357 | 358 | 359 | 360 | 361 | 362 | 363 | 364 | 365 | 366 | 367 | 368 | 369 | 370 | 371 | 372 | 373 | 374 | 375 | 376 | 377 | 378 | 379 | 380 | 381 | 382 | 383 | 384 | 385 | 386 | 387 | 388 | 389 | 390 | 391 | 392 | 393 | 394 | 395 | 396 | 397 | 398 | 399 | 400 | 401 | 402 | 403 | 404 | 405 | 406 | 407 | 408 | 409 | 410 | 411 | 412 | 413 | 414 | 415 | 416 | 417 | 418 | 419 | 420 | 421 | 422 | 423 | 424 | 425 | 426 | 427 | 428 | 429 | 430 | 431 | 432 | 433 | 434 | 435 | 436 | 437 | 438 | 439 | 440 | 441 | 442 | 443 | 444 | 445 | 446 | 447 | 448 | 449 | 450 | 451 | 452 | 453 | 454 | 455 | 456 | 457 | 458 | 459 | 460 | 461 | 462 | 463 | 464 | 465 | 466 | 467 | 468 | 469 | 470 | 471 | 472 | 473 | 474 | 475 | 476 | 477 | 478 | 479 | 480 | 481 | 482 | 483 | 484 | 485 | 486 | 487 | 488 | 489 | 490 | 491 | 492 | 493 | 494 | 495 | 496 | 497 | 498 | 499 | 500 | 501 | 502 | 503 | 504 | 505 | 506 | 507 | 508 | 509 | 510 | 511 | 512 | 513 | 514 | 515 | 516 | 517 | 518 | 519 | 520 | 521 | 522 | 523 | 524 | 525 | 526 | 527 | 528 | 529 | 530 | 531 | 532 | 533 | 534 | 535 | 536 | 537 | 538 | 539 | 540 | 541 | 542 | 543 | 544 | 545 | 546 | 547 | 548 | 549 | 550 | 551 | 552 | 553 | 554 | 555 | 556 | 557 | 5 |
|-----|-----|---|

- [illegible]

分かり難いが（画像を拡大して欲しい）上段に出詠番号と作品、
継いでその短評を添えて列記してある。そして下段にも別の
記事が入る割り付け。作品と短評のフォント・サイズが異な
る、かなり込み入った誌面を形づくる情報一杯の頁である。

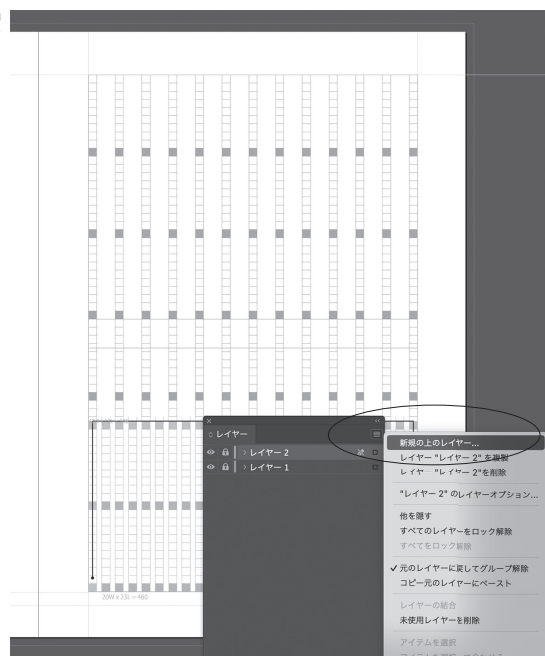
レイヤーを使わず一枚の誌面でこれを作るとしたら、「詠
草」と「短評」の原稿テキストを同時に開いておき、その一
首ずつ、その一短評ずつを順にコピー、そしてペーストを繰
り返すという超アナログ操作のデジタル組版となってしまう。
さすがにそこまでアナログではやりたくない。というこ
とでレイヤーの活用に踏み切った。

レイヤーは三枚に分けて作った。二枚目に「詠草」を流し
込むフレームグリッド。そして三枚目には「短評」を添えら
れる文字枠を、詠草と詠草の間のスペースに入るように「ブ
レビュー」を見ながら慎重に設定した。その前に作った一枚
目には下段用に関連記事を入れる文字枠を罫線で飾るように
設定した。

これによって、「詠草」をすべて選択してコピーしてペー
スト。次に「短評」の方を同じようにイメージ誌面へ流し込
む。これで終わりなので操作はいたって簡単である。

参考のためにこの折に設定したマスターページを「詠草」
と「短評」に分けると下段のようになる。実際の画像ではレ
イヤー別に文字枠の色設定もあって、それぞれ色が違うので
見分けに戸惑うことはない。

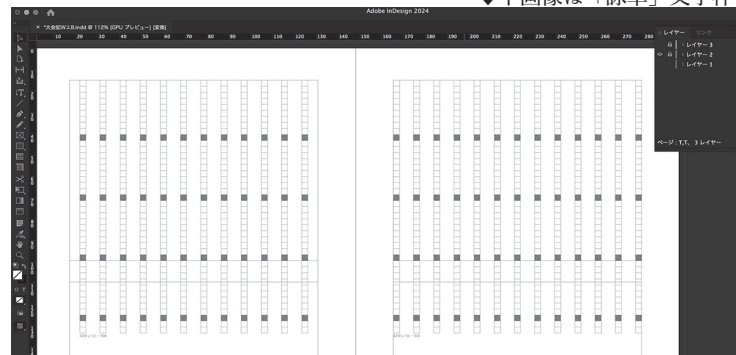
念のために新たにレイヤーを重ねて操作する手順を説明し
たい。前ページの上の画像（詠草欄）を設定し終えて、レイ
ヤーパレットを表示させる。そのパレットメニューから、



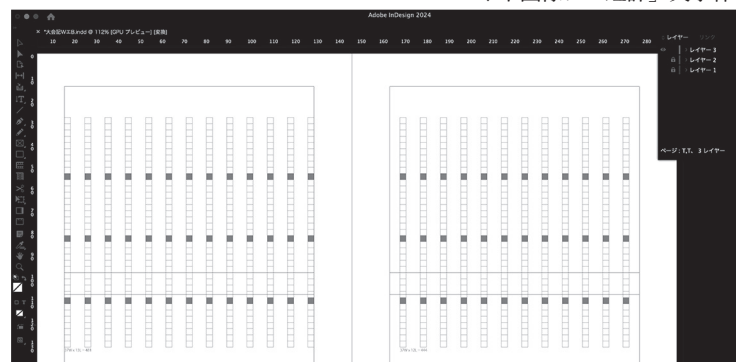
「新規の上のレイヤー」をクリックする（右画像マル囲み箇所。
古いバージョンでは「新規レイヤー」となっていた）。

そうすると下段画像のようにダイアログが表示される。「カ
ラー」とあるのは設定されるフレームグリッドの「色」指定
である。レイヤーに分けてもイメージ誌面は平面なので区別
を明らかにする必要がある。設定では「オレンジ」とする。

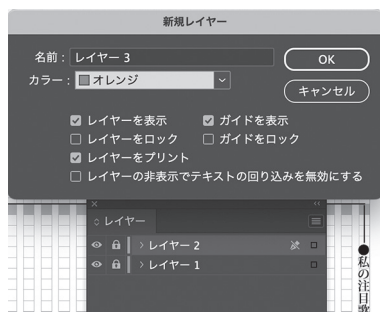
↓下画像は「詠草」文字枠



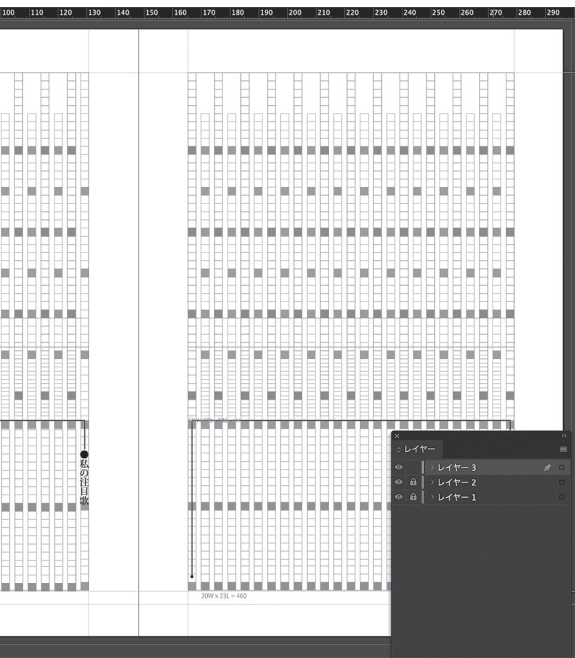
↓下画像は「短評」文字枠



右画像を一枚に併せると前ページの画像の上段のようにな
る。レイヤーなので、本稿(4)で述べたレイヤーパレットの
やののことを忘れずに操作してほしい。



上画像のOKをクリックすれば
「レイヤー3」が「レイヤー2」
の上に乘せられることになる。
操作する時は「レイヤー3」
のを消して（他のレイヤーには
表示させる）レイヤーをクリック
してアクティブにする。の
表示は付けておく方が設定はや
り易いと思う。そうして完成
したのが左画像。ごちゃごちゃ入り組んでいるが、色設定が
生きてくる誌面だ。これをマスターページ保存する。



以上で本文を作る上で必要なことはほぼ述べた。あとはその応用に尽きるので、その場に応じて工夫するしかない。

これからは作り上げたデータを纏めて、印刷所へ渡す段階の作業になってゆく。

複数の手に分担してデータを作れば、それは幾つかのブロックに分けられたものができるだろう。また一人の作業で作る場合にしても、幾つかに分けてデータ保存をして一つ一つのデータが重くならなくする配慮もある。操作中のブロックの総データ量が重くなると、マシンの動きや反応が遅くなることにもなるので留意せねばならない。

「冬雷」では月々概ね2〜3個のブロックに分けて行うのが常になっている。実際にはそのブロック別にPDFに書き出しても特に問題はないのだが、例えばすべて見開きで作り一冊まるごと表示する場合などは途中中断があったり、一ページだけの見開きにならないページが挟まったりでは体裁が悪いことになる。そんな時に「Book」機能が使われる。

インデザイナーの「ファイル」→「新規」→「ブック」と選択してダイアログを出す。そして必要項目を入れて「保存」をクリック。それが下図画像①となる。続いて「ブック」メニューから「ドキュメントの追加」をクリックすると、下図②となつて、「冬雷」2024年2月号組版」を選択し、表示された画像で確認したら「開く」をクリックすると、ブックの枠の中に書き込まれる。画像③である。

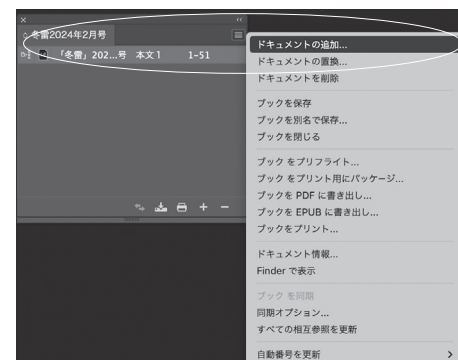
画像③の説明の中に記したようにブックメニューから「ドキュメントの追加」をクリックして、もう一度候補を出し、示された画像を確認して「開く」（マルで囲む）をクリックすれば「追加」が実行される。左の画像である。

見ての通り、ブックの中には二月号の本文1（1〜51頁）と2（52〜96頁）が纏められ本文が一つに連結した。マルで囲んだ所にメニューが隠れているので、ここをクリックしてから、すべての操作が始まることになる。



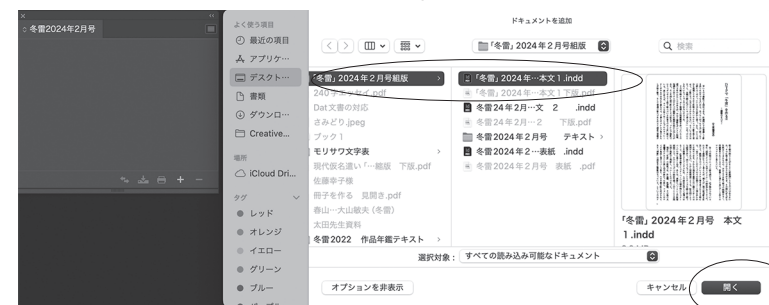
↑ 画像①

↓ 画像②

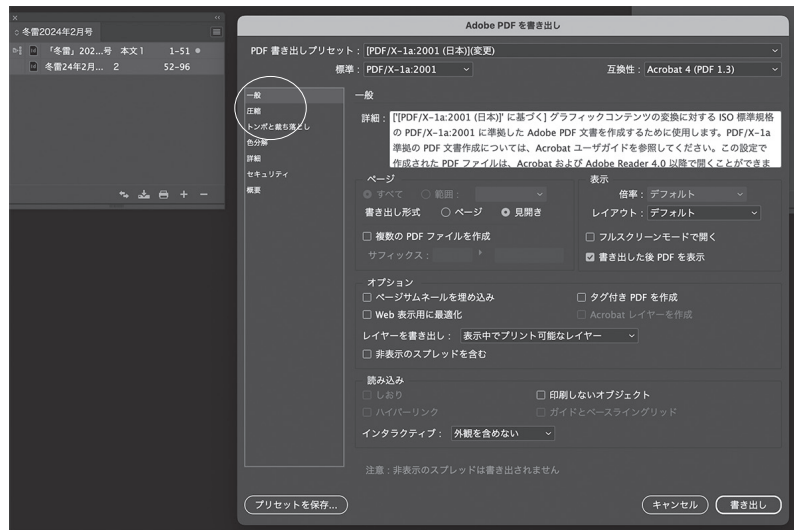


↑ 画像③

ブックメニューから、もう一度「ドキュメントの追加」を選択し候補を表示させる。



それでは「ブック」からデータを書き出すことにする。先ずブックに入っているすべてを選択すると表示が濃くなるのでそれを確認したのちに、メニューから「ブックをPDFに書き出し」をクリックする。すると左の画像が表れる。



上画像の中の「詳細」には、[PDF/X-1a:2001 (日本) に基づく] グラフィックコンテンツの変換に対する ISO 標準規格の PDF/X-1a:2001 に準拠した Adobe PDF 文書を作成するために使用します。」云々とある。このスタイルが、印刷用データ受け渡し時において基本的に使われる。



さて、印刷用データが完成して「書き出し」をかける時には、そのデータに操作ミスがないことを確認する必要がある。意識せずに行っている思わぬミスって結構遺るものだ。先ずインデザインメニューから「ウィンドウ」↓「出力」↓「分版プレビュー」と選択してゆく（左画像マル囲み）。すると左下の表示が出る。

これは主にカラー印刷データに使う4色分解機能である。五段に分かれ、上から4色すべて。二段目「シアン版」。三段目「マゼンタ版」。四段目「イエロー版」。最後に



このPDF書き出しスタイルは、「見開き」の印刷用トンボ（仕上がり寸法も表示）を付けた形で作り、校正のゲラとして使う場合も、「単ページ」出でしでトンボを付けない形での「下版（印刷用データ）」として作る場合も活用される「PDF/X-1a:2001（日本）」という形式である。

書き出すデータが見開きなのか、単ページなのかで指定する

以上がデータのPDF書き出しの流れだが、ここで述べたブックを制作してからのもの以外に、操作中のインデザイン画面からでも簡単に行うことが出来る。開いている画面から「ファイル」↓「PDF書き出しプリセット」↓「PDF/X-1a:2001（日本）」と選択してゆけば、いま述べてきた画面が表示されることになるのだ。インデザインは使い勝手の良い組版ソフトだといつも思う。悩んでいるより即実行、難しく学ぶより失敗を恐れず慣れよ、である。

の段が色の「K」である「黒版」表示となっている。その一つずつ印を付けて表示させることが出来る。「冬雷」はカラー印刷でないから、上のCMYK4色と、「K（黒版）」の印を消すだけで検版了が見込まれる。

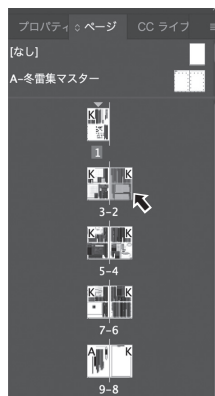
左画像のように、全誌面が「白」で表示されれば問題ないということだが、仮に何かの絵柄が見えたら即対応だ。《続》

態で「書き出し」をクリックすると、完全トンボ付きの見開き誌面となって、主に印刷用ゲラとして使われるデータとなる。例えば、電子ブック的に作りトンボを消したいという希望には、「見開き」設定のままトンボと裁ち落としをオフにすれば良いのである。「冬雷」ホームページアップ用に広報で制作するのはこのデータということになる。

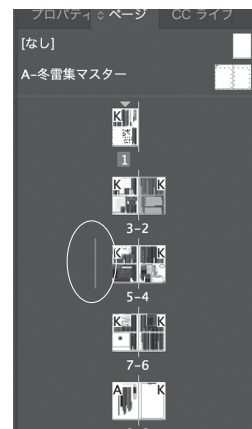
さらに印刷所へ渡す「下版」データを作るのであれば、前のページ下段画像の設定で、「見開き」のチェックを外し、「ページ」（古いバージョンでは「単ページ」とある）の方を選択する。上段の画像では、トンボを付けず誌面に裁ち落としが無ければ、こちらオフのまま書き出せば良いということになる。仮に本文の中のどこかに1ページでも裁ち落としドキュメントがあるとしたら、設定では、「3ミリ」の「裁ち落とし」を記す必要がある。

● ページパレット

組版の最後にページパレットについて少し述べたい。ページパレットは上の段にマスターページを表示し、下の段には今動かしている本文ページが表示されている。共に、そのページをアクティブにしているときには薄いブルーに変わる。表示は必ず奇数ページ単独より始まり、次いで偶数ページと奇数ページが横並びになり、このパターンで連なっている。左画像である。



画像は「ページ2」を矢印カーソルで選択している。このページを選択したままドラッグすると希望のページ間に丸ごと移動することができる。



右画像のマルで囲ったところに、白線が見えているが、この「ページ5」の左側（5ページの次へ）に移動させようとしたところ。この白線の出た箇所には置けばドラッグ完了となる。

「ページ2」が移動して、「ページ3・ページ4・ページ5」が一つずつ繰り上がってゆき、ページナンバー表示は自動的に新たな「1」から順になる。

この機能は組版時にはよく使われるものである。画像では「単ページ」での移動をしたものだが、そこを2ページ見開きでの移動とか、数ページを纏めて移動させるのも可能である。

● 下版時の最終チェック

「分版プレビュー」による最終チェックは画像の入った場合のみではなく、見出しなどで設定された網枠とか太めの罫線等のある時も必須である。どこか一カ所にも色情報や抜け切っていないところがあると印刷所においてCTP（コンピュータ・トゥ・プレート）の略。アナログではフィルムを作り焼き付けていたが、デジタルとなりパソコンから直接印刷機用プレートを排出するようになった。）が出せなくなる。

単ページ出しPDFデータをスクロールしての目視によるチェックも必須である。ここで見てゆくと実に驚くほどミス操作や気づかなかった誤植箇所等が発見される。「良かったなあ」なのだが、実はこの時点での発見はネイティブデータの訂正と保存、そしてPDF書き出しから再チェックという行程の遣り直しを意味している。

冬雷集

大山 敏 夫 埼玉

目標地点に五十五メートル外したるはピンポイント軟着陸成功なり

ピンポイント着陸に成功したるSLIM歓喜の逆立ちのポーズしてをり

胸に巻く太陽光パネルに陽があたりSLIMの蓄ふる未来の力

SLIMより撮影したる月の岩十を選びて犬の名記す

月の岩最も近くに見えるは「ときいぬ」もつとも遠く「セントバーナード」

画像には「しばいぬ」も「あきたいぬ」もあてあきたいぬの方がとほくちひさし

神酒の海クレーター「しおり」の至近とふ蠱惑的域にSLIMは憩ふ

日没の迫る月面黒く濃く翳りきてSLIMもその中に入る

マイナス百数十度といふ月の夜二週間続きSLIMも眠る

身を奢るなく

赤羽 佳年 東京

役目終へ時雨に濡るる廃棄本無残に膨れ哀れなるかな

古書店に資料と求めし幾冊かもう必要とせず括られてごみ

紙魚食ひの本を括りて始末する資料としての役終へたれば

必要性高きもののみ調へて物は増やさず身を奢るなく

検眼を怠りゐたりもみぢ照り背なに受けつつ眼鏡を拭ふ

検眼を怠り三月小春日を背に感じつつ送迎車待つ
これからも安分守己に生き行かん己を知れば奢りは出来ず
衰ふる視力のままに年を越すパソコンモニターに向かひ除夜の鐘

赤 間 洋 子 東京

我が住むマンションの避難訓練実施さる去年より参加者はるかに多し
元旦の能登半島地震の直後にて消防士の話真剣に聞く
消火器の使用訓練も手順よく参加者全員落着きてする
会長より金一封と細長き箱傘寿を祝ひて手渡しされる
長き箱見守る前で開けたれば傘が出てきて更なる拍手
体操終りエレベーターに乗合はす男性九十四歳と八十八歳
冬雷の山崎様が百歳越えをれば我も追ひたし健康生活
肺結核と胃癌病みしは過去のこと今は元気で独居生活

兼 目 久 栃木

どうしてこんなことになったのだらう石川県の老婆言ひたり(能登半島地震)
長距離を伝はり揺るる能登地震わが家も揺れる小刻みにして
九万人の市民の水を汲みあげて本市の飲料水地下水に依る
移植するが遅きに失す十月末天の恵みよ白菜まるまる
側溝の上に生ひたる冬苔は棒でつつけばころりと動く
雀二羽電線に止まり一対一に向き合ひてしばし互ひに見つめる
無性にも山に引かれて単独に山に登りし二十代の頃

若き時単独行に2486mの男体山に道を違へり

下りるより他に方法なし道なきも下りて林道工事に出くはす

山 崎 英 子 東京

節分の今宵大きな声あげて豆を撒きしははやも昔の話
窓を開け豆撒く人の在りや無しや声等聞かず静もる節分
深川に住みゐし頃は不動様活気の在りし家族にて詣でしを
縁日を楽しみ集ふ人溢れ参道などに流され歩みき
月に一度の七味唐がらし好みて求むるうれしさのあり
二月八日早くより予約の病院に心は重く娘と向ふ
入院を告げらるるのではと心の重く先生と対き合ふ
状態は良いです大丈夫です先生のお言葉帰りは食事へ
外食は何を食べても甘味勝ち皆こんなに甘党かしらと

森 藤 ふ み 東京

ベランダに固き芽の付く小枝あり垣根の剪定終はりたるらし
湯たんぽの湯に少しの水を足し朝の洗顔手早く終へる
立春の朝のカーテン開けたれば外は曇のしきり降りくる
小止みなく雪の降りくる夜の空にくぐもる音に雷鳴とどく
人形焼買ひ持ち歩く横丁に行列してゐる鯛焼き屋あり
痛む足引きずり歩く速さにて歩数計に数字増しゆく
一つのみ残りをりたる実の見えずハンカチの木未だ芽吹かず

寒に入り

櫻井一江 東京

寒に入り寒さ更なる能登の地に生き抜く人の画像に平伏す
スーパールの売場に揃ひ寒シジミ寒ブリ寒タラうたふ旬の味
正月の七草粥は端折る事すんなり進めフリーズドライに
街路樹の櫛はすばつと葉を落とし根方の紫陽花枯るるを保つ
隅田川テラスを行けば寒スズメ茂みの中をがさごそ動く
寒月と並ぶ五十八階建ビルは直線の灯のみ伸ばし静もる
足早にビル影抜けて冬日差す信号待つ間のぬくぬくの暖
故郷のどんと焼きの景懐かしみ熱く語りて小正月の過ぐ

有泉泰子 山梨

地震にて集団避難を余儀なくしたる子等幼き吾の姿と重なる
戦時中千葉に疎開せり祖母伯母のゐて姉の側をはなれず吾は
街中が雪で囲はる夜の景街灯やさしくお伽の国のごと

「大丈夫、転ばぬやうに気をつけて、外出禁止」と娘よりの電話
雪とけて緑の葉々のつややかに一重の椿紅き花咲く
縁側の椅子にもたれて船をこぐ夫の姿と父が重なる

富田眞紀恵 富山

久々にわが家へ行くのか旅に似る施設のくらしも長くなりつつ
幼き日心に淋しさ覚えつつ晩秋といふ言葉習ひき

六畳の部屋が私の住み家ですそれでも住めば都と思ふ

旅をせぬどころか今は六畳の施設が私の全世界です

黒田江美子 千葉

四年振りに総合行事再開のシルバーセンターに薄日射し来る

突然の活動中止は四年前多くの利用者閉ぢ籠りたり

規制しつつ一部活動再開となりたる頃も利用者減少

消え掛けた体操グループ「フレイル」の予防を説きて仲間呼び込む

センターは利用者による自主運営小波立つも四年を凌ぐ

新春の発表会の再開に自主運営のおぼろに繋ぐ

四年振りの発表会の開催に出演希望の名乗りは続く

記憶たどり繋ぎ合はせて運営のながれ見え来る新生の会

久し振りに会ひたる友は九十歳今舞台にてリンパ踊れり

青木初子 神奈川

届きたる新年会の同僚の写真に臉上へとひらく

同僚の一人一人を確かめる如く写真に瞳を凝らす

写真見て思ひ出ししか眼頭に涙溢れる言葉なきまま

眼頭に溢れ出でたる一筋の涙の意味を知る由あらず

面会の時間がコロナと流行り風邪に三十分のみあつと云ふ間よ

灯り消し部屋より出づるドアノブの蓄光シール行く先示す

ドアノブの蓄光シールの薄明りに真直ぐ進める暗闇の中

路地隔つ隣の百坪継ぐ人のあらず売られて三軒建つと

隣庭の白梅牡丹枝垂れ梅全て伐られる媼亡きあと

中 村 晴 美 茨城

避難所の劣悪ぶりは変はらぬか能登地震にいつか見た景
被災した能登半島に雪の落つ潰れし屋根をふんはり包む
ポイントの全てを能登の義援金へスマホでできる小さき支援
リフォームの種の尽きなき古家なり今度はキッチン傷みの目立つ
海外製食洗機の導入を決めて始まるリフォームプラン
見積りは四百万のリフォームに退職金の目減りは早し
七十までは夫は働くと呑気なり退職金のほぼ消ゆる今
姑が蒔蘿草を届け来ぬ畑が生き甲斐九十二歳

山 口 嵩 福島

五千余の子らの命を奪ひなほ飛ばすドローンをその神知るや
病院も避難の場所も区別なくロケット弾はガザのそら駆く
空爆に怯えて竦む子を庇ふ母の姿を「見詰めよ」為政者
光り受け左右に横にゆれて降る雪は吾が胸、袖に消ゆめり
十数個枝に残れる花梨の実未明の風に残るは五個と
陽だまりに何を啄む群すずめ撒きたる古米すでに失せるに
宴席を外して入る露天風呂ほつと一息日帰り旅行
泉質のことなる湯舟三つめぐる最後はくぐる男湯のれん

吉 田 綾 子 ☆ 茨城

新年の祝いも空し悲惨なる能登震災の映像に傷心す
神前に供えられたる迎春の生花萎えずに立春を迎う
春立てど寒気の襲い雪が降る能登震災の暮しは如何にぞや
何よりも戦争の無き世にしたし誰かが願い誰かが望む
大学の入試に挑む孫娘体調管理に心を砕く
湯たんぽの温みの優し床の中両手を胸にひと日を巡る
いにしえより「霜道」と謂れる我が里に梅の綻び陽射し煌めく
新聞やテレビを騒がすパーティー券裏金問題佐しきことよ

橋 本 文 子 鳥取

高齢者体調管理の新聞を四ヶ月ぶりに再読したり
久しぶり髪切りに行き店長に心配してたと声かけられる
とつぜん「すばらしい」と服をほめる人端布の自作と告げてゐる我
石川県冬の災害どんなにか耐へ難きかと心配続く
新潟と富山も被害受けてをり冬を耐へゐる人々を案ず
この冬は気温高いかミニトマト二月に赤い実を採る日のあり

酒 向 陸 江 ☆ 東京

家がゆれ「おや？」とテレビをつけたれば能登の地震をニュースは伝う
總持寺の本山訪ねしことありき門前町の地名なつかし
活気ある朝市担うおばちゃんが「必ず復活」とマイク向けられ
海岸線ぎりぎりまで山の能登半島老いたる方々ご無事であれと

能登みやげの柿渋のバッグ取り出して応援のこと考えている
バスに乗り月命日の墓参り風冷たきに陽差しは強し

玄関を開ければ香る蠟梅の花の一枝友よりの賜物
宝登山に蠟梅咲く頃訪れき友も吾も十年若く

天 野 克 彦 大阪

雲間洩る直ぐなるひかり神さびて生駒群やま真向かひに見ゆ
ひかりうすき冬の入日は朱のとけて西はたちまち曇りにしづむ
夜のふけの机に座りたばこ吸ふ書棚のガラスに赤き火映る
硝子まど月に向かひて開きけり蒼きひかりが机に射しく
窓ちかき枯木の枝のゆれゆれてときに輝く月のひかりに
遠じろくうごく月夜のわた雲はいづく行くらんあの山越えて
あたたかき日差しあまねく公園に昨日も今日もながく居りたり
公園にあそぶ子供の影寒き夕べとなりぬいざ帰らんか

高 松 美智子☆ 栃木

冬土用が明けるを待ちて草を引く春立ちて目を引くは水仙の直立
スイートピーの薄き紫が瓶の水に色と香りを吸いとられて白
「まだ出来る」「でも今しかない」これからの私を浮かべ退職決める
うしろ髪引かれる思いを残しつゝも十年勤めたる職を退く
立ち上げより施設にかかわる仲間等と手さぐり夢中の十年が浮かぶ
十五ほど年の離れた同僚を相方として助けられ来し

横浜港を見下ろす高層レストランがお別れランチの場所だと誘わる
同僚がつくるアーチに見送られ花束抱えて卒業をする
今ときめく地元企業の広告をボディに掲げ路線バスが走る

高 橋 説 子 栃木

枯れてなほ線路に沿ひて丈高く背高泡立草の確と
片思ひの朝日を待ち伏せするやうに俯き加減の白き月浮く
時くれば忘れず芽吹く木々なるか凍てつく庭に霜柱ふむ
雨上がりの光集めて反射する塗り直されたる「止まれ」の白文字
目覚ましをかけずに眠る金曜の夜が好きああ月が綺麗だ
外出の予定なけれど身だしなみ程度の仮面をつけて庭掃く
登校班にだいぶ遅れて父と手をつなぐ児もゐて雪残る朝
根元から伐ると決めれば十個採り最初で最後の柚子ジャムを煮る
物価高騰支援金なる七万円にティショットクシャと刻印のあり

大 塚 亮 子 東京

降り続く雪にふる里思ひつつ窓近く寄り空を見てをり
大屋根に雪下ろしせし若き日の父思ひつつ降る雪を見る
父下ろす雪を大きなソリに積み川に捨て行く兄弟達と
ソリに乗り遊ぶ楽しさ思ひつついつも手伝ふ雪下ろす日は
雪積もる土手より田圃に突っ込みて助けられたるはるか昔に
冷たさに家につけ込み手をかざす囲炉裏に母は餅焼きくれし

両の手にわが手を包み囲炉裏火に揉みてくれにし荒れたる母の手
吹雪くなか上級生につかまりて離されぬやう登下校せし
友たちは元氣だらうかコロナにて会はずに三年八十を越す

赤のプリウス

嶋 田 正 之 埼玉

八十六の同窓会を開かむとパソコン画面の名簿見直す
一年を過ぎぬ間に名簿より削除せる友幾人か居り
幾人の出席あるや分からねど去年より減るは致し方なく
モツ鍋を囲み息子は盃を手に諭しくる免許返納
大さ事故起こさぬ内に引く決意為すべき時と傾きゆきぬ
老人の運転事故を聞くにつけ己が齢と比べ落ち込む
令和六年四月の車検を受ける前処分と決める赤のプリウス
買ひ物に自動車使ふは当たり前不便となるは必定にして
使はずに仕舞ひ置きたる電動の自転車いよよ出番となりぬ

江波戸 愛 子☆ 埼玉

こもりいるあなたを誘いて如月の日向の道をゆっくり歩む
犬二匹連れてあゆみし並木道よこに見ながら夫と歩く
歩みつつ少し猫背となる夫の背中にふれば背筋を伸ばす
日の当たる道をえらびて歩みゆく今日はあなたの右側に添う
並木みち藤棚いくつかあるけれど木通の実の生る棚ひとつあり
並木道おわりて見ゆる小学校わが家の三代通いしところ

家までの道はあなたに任せます日溜まりもとめて歩くあなたに
公園の中を通れば近道と言えどあなたは横に首振る
三十分程の歩みを終えてきて二人でお湯割り麦茶を飲みおり

町 田 勝 男 埼玉

完璧な人生などはありませんわが納得の卒寿となりぬ
名付け親の寺尾が泉下で泣いている愛弟子の阿炎なにを迷ふや
隊員は能登の現場でどろまみれ陸自幹部は靖国参拝
米をとりに実家にゆきし妹は幼馴染の情報持ち来
耳鳴りの音がさいきん支離滅裂例へやうなく言葉失ふ
爆破事件の偽名で生きる桐島聰せめて最後は実名でと言ふ
実名は親がくれたる詩の一片それが君のアイデンティティだ
明けやらぬ処女雪ふめば靄たちこめ視界はせまう三芳野おぼろ

稲 田 正 康 東京

子が喃語つづけし頃を思ひをり隣りの赤児しきりに泣けり
人類は確かに哺乳類なのだ焦りて乳首さがしをりし子
左足に体重うまくのらぬことひとには言ひて少しづつ歩く
わづかなる系譜の違いひ立てて宗派對立戦争となる
銃つくり安倍元総理撃ちたるは学科の成績すぐれゐたりと
ノルマをば超えたるものは私するほど昔からあり得た話
ノルマとはソ連抑留に出でしことばいつか責務の通用語となる

同じ海に自国が獲るは流通させ日本船の獲るは危険ありといふ

橘 美千代 新潟

骨折をしたるを忘れ以前のごと動かし手首の痛みに声あぐ

「無理しないやうに」と医師いふ無理せねば動きの改善のぞめぬものを

口あたり良くすぐ溶ける歌よりもにがさの残る歌に会ひたし

ここ二十年地震あひつぎ壊滅の画像流さるいく度もいく度も

いま最も危険といはるる断層のま近く住むも未だに割れず

昔ながらの土のままの道たふれふす枯れ草つもり減びてゆくも

皮膚の色よく見えるやう診察室の窓は北向きアトリエのごと

ステンドグラス透す光の星くづのごとく散りぼふ夜の診察室

古本の歌集を買ひてひらきたるページにひとすぢ黒髪のあり

ブレイクあずさ☆ カナダ

電話にも戸口にももう出ぬ友の庭に見上げる重き冬空

快活に友は笑いき軽々とステップ踏みし四か月前

声すでに失くせる友の打つメール繰り返し読む朝の来るまで

「ニューロンが壊れたみたい困るよね」明るい調子は友のプライド

刻々と閉じ込められてゆく友の恐怖も孤独もやわらげられず

友の家の扉の前に花を置くビタミんカラーに言葉を託して

うつむきて歩くわが背か「見て、虹だ」追い越し様に少年の言う

友の詩を日本のことばに訳す夜一行一行声にして読む

「カイピラの小さな汽車」をウクレレに歌えばしばし風は止みたり (O Trenzinho do Capira)

古 嶋 せい子 熊本

つはぶきの終はりさざんくわ咲き続く季節にあへりこの年までは

野に寝ねて流星群を見てみたしこの世に残る未練のひとつ

てふてふを蝶蝶と読む人をらずわれのめぐりはわれより若し

たんぽぽの綿毛のままに年越しの風待ちてをり朝の日の中

はじめての満月と聞く一月のよる庭に出る事の叶はず

字のかたち崩れてゆくを嘆きをりかかる事さへ思はざりしを

バーゲンの品とぞ言ひて送りくる娘えらびしロングの部屋着

胸元に乾く飯粒のこりたりして深みゆく老のかたちは

ひとひらの雲なくあをき空晴れて鳶の声きくけふ小正月

姉 川 素枝子 福岡

自らの家に帰りてほのぼのと真昼のやさしき日のなかにある

「丸く生きる」^{まある}いい言葉だと思ひつつ丸き餅たぶ雑煮のもちを

年かはるあした四人の家族にて御酒のみてをり吾子年男

婆ちやん駄目だねえなどと言はれて嬉しめる喉おちゆくやはらかき餅

鉢うゑの五葉の松をなでれば古き葉ちりて散りつもりたり

穏やかな夕べになりて白き雲はつかに東へ流れゆくらし

脊振嶺のま紅き夕日にわくごとく飛びし鳥のむれの見えずも

山並に日のかくろへば灯しつき集合住宅の電飾になる

松の芽の天に向かひて伸びたるを見ぬふりをして施設に戻る

井 上 菅 子 山形

玄米が湯気噴き上ぐる朝六時糠の匂ひが命を濃くす
四世代共に暮しし日も遙かことし義父母の二十七回忌
幾人の痛みを載せて平たきか接骨院に干さるるシート
稀に射す冬日うれしく歩む道枯生の雀ふいに飛び立つ
少しでも緑の多き葉を選び産直に買ふ冬のかぶら菜
タッチパネルに注文をしてロボットが運ぶレストラン次には行かぬ
純和風家屋にあればリビングもベランダも無し戸の棧を拭く
築五十年耐震性もなき家をいとほしみ住む夏は簾戸に替へ
天然色の牡丹園やつつじ園夫在りし日にまた戻りたし

日本短歌総研 編著 固有名詞の短歌コレクション 1000 (飯塚書店刊)



まこと賑やかで楽しそうな本となっている。ペンクの帯文が「だれもが知っている固有名詞 みんなが知らない固有名詞 広くて深い固有名詞の樹海雲」と踊っている。主幹の依田仁美氏が「万葉から現代のSNSに弾む歌まで、さまざまな文化の枝葉を手にとつて眺め」選んだ千首が社会・文化・人・自然の四つに分類されて読み易く纏められている。どこを開いても面白く、勉強になるし、刺激もいっぱいである。依田氏の言うように「座右に置かれて折々、鑑賞や実作の友として」の活用もできる。信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまら

く黄なる空のいろ 島木 赤彦
音楽寺までの思想をときつつも空白ほそく水流れをり 小中 英之
左手に金の扇子を持ちて立つ夢二の女の立ち姿 奥村 晃作
瀬戸川に沿って白壁の蔵ひとつ酒造りの蔵よ四斗樽ならぶ 晋樹 隆彦
あげたい歌は尽きないが、目に留まるまま幾つか紹介した。有難い事に大山の四首も収録されている。上福岡駅前から続く大通り雪の富士山へむかひ走りぬ 大山 敏夫 《編集室》

二月号冬雷集評

山本 三男

選歌して割付けをして組版して電話に議論してひと月終る 大山敏夫
初句から四句まで「して」という連語で続いて「終る」という言葉で結ばれています。結句に過ぎ行く日々への感慨が込められているでしょう。筆者はこの原稿を書くのに、作品や作者名はコピーアンドペーストを利用しており、それが出来るはこの様な努力のお陰です。

人間の身長よりも高く伸びセイタカアワダチサウ実を結びをり 兼目 久
セイタカアワダチソウはよく見かける草ですが、実も付けるのですね。よく観察しています。この草は外来種ですが、今ではすっかり日本の風景に溶け込んでいます。名前の字数は十文字もあります。違和感なく歌に収まっています。

「ブギウギ」と口遊みつつ掃除終ふ心うきうき明るく過ぎさむ 有泉泰子
この一首は結句を字余りにしたところ

に作者の思いを感じます。「明るく過ぎす」とすれば、定型にピッタリと収まるのですが、そうは歌えなかったのでしょうか。朝ドラの「ブギウギ」は筆者も観ています。毎日流れる明るい音楽についていけないと思うことがありますが、パソコン画面ばかり見ている筆者には、その十五分間は気分転換になります。

胡瓜棚しまひ小松菜撒く鉢に若芽の育つ米子住みよし 橋本文子

結句に集約された素直な感情がよく表われている一首だと思えます。作者は信州の出身のようですが、それがこの言葉となったのでしょうか。自然の変化と共に暮らす生活の確かさを感じます。

八月に葉の半分を散らしたる金のなる木に三年ぶりの花芽 高松美智子☆
金のなる木は花が咲くと縁起が良いと言われていますが、なかなか花が咲きません。三年ぶりという言葉に花が咲くのを待ち望んでいた様子が表れています。開花すれば良い事があるかも知れません。老いて今バツハの曲に巡り合い喜び一

杯ピアノに向う

酒向陸江☆

喜びが伝わってきます。ピアノが弾ける人がうらやましいです。以前流行した「もしもピアノが弾けたなら」という歌謡曲がありました。一度覚えた指先の感覚はいくつになっても忘れないですね。

電話より手紙の好きな兄の為大きな半紙いつばいに書く 大塚亮子

いきいきとお兄さんに手紙を書いていく様子が伝わってきます。電話は事務的な事柄を伝えるには便利ですが、思いを伝えるには不向きな面もあります。作者も手紙が好きなのでしょう。

熱中症のポスター長く貼られあり秋になつても暑いこの年 稲田正康
昨年の夏は異常な暑さで、例年なら涼しくなる頃まで暑さが続きました。そのため熱中症に注意するポスターがいつまでも貼られていたのでしょう。古くは、風の音で秋が来たのを知り驚くという歌もありましたが、その様な季節感はずいぶん失われてしまっているように感じます。

作品一

桜井 美保子 神奈川

混み合へる電車に坐れる若きひと当分降りる気配のなくて
品川に着けば大部分降りゆきて暖かき席にやうやく坐る
けんけんをしつつ体の向きかへる四、五秒の振りありて手ごはし
きつちりと足を包める五枚こはぜ白足袋に踏む稽古場の床
健康に関する本の並ぶなか「ナンバ歩き」の背文字目に入る
膝や腰に負担少なき歩き方覚えてみようか今から吾も
現代のウォーキングとは異なるナンバ歩きを動画にも知る
買物の行き来にナンバ歩きせり二軸歩行に手を上下させ

田端 五百子 岩手

兵児帯のやうに入江の大船渡湾いま新春の光みちくる
「良きこともあつた」ガードル眼鏡義齒私を解体し手足を伸ばす
船の名で呼び合ひ漁師ら円座なく網を繕ふ小春の岸壁
木枯しに吹き寄せられしか行く道の窪地の雨水皺よせ凍る
百歳と名乗れる漢はバスの席確保したれば「数独」ひらく
「七つの信号止まらずに来た」大安の今日宝くじ買ふといふ漢

「もう一本」と徳利を振る漢のゐておでんの大根はんぺん旨し
凍る夜に雪道照らす満月は地上の闇を溶かすごと輝る

野村 灑子 千葉

来客を知らせるチャイムに降りゆけば針仕事の糸ら共につきくる
乗客の落としたる菓子くづついばみて発車のベルに鳩降りゆけり
針穴は大きけれど目は老いて糸先なめなめ糸を通しぬ
濯ぎもの干さむと伸ばす手の先に強風おこりマスクは飛びたり
洗へども消えぬセーターのシミの跡隠さむと紫の菖蒲を刺繍す
遺品なる法帖賜はり几帳面な師の性思ひ謹み開きぬ
空气中に種は飛ぶらむ柔らかき庭土に生ふる小さき白花

正田 フミエ☆ 栃木

体調を少し崩して籠もりいる収穫予定の白菜思いつつ
庭に来る野鳥眺めてほのぼのと冬枯れもまた楽しくなりぬ
体調の戻りいまひとつ冬枯れに紅梅咲きて元気をもらう
白菜や大根収穫遅くなれば凍れるかもと健やか願う
体調の戻りて来ればビオラ鉢萎れかけたるにぎあざあ水を
畑にて白菜収穫虫食いの外葉落とせば花芽がのぞく
四キロの白菜外葉の虫食いを落とせば小さく二キロと悲し
申し込み用紙捜さん冬雷の一、二月号見るに眼留まる

飯塚 澄子 東京

表紙絵の花弁の厚みちぎり絵の和紙の如くに趣深し
表紙絵の説明読みて嶋田氏の「月下美人」のご苦勞を知る
書の道の新年会に師の母の白寿の方も見えられにけり
父譲り書に勤しみて坂東流師範となりて母君教へる
祝白寿弟主催の祝賀会記念写真を宴会に回す
師の母の白寿を祝ふ書の弟子ら大花束贈る宴席
膝関節注射と薬で治療すれど効果なくして手術は如何と

齊 藤 トミ子☆ 栃木

食べて直ぐ横になるなど夢のよう三食昼寝付きの入院生活
夫の事店の事など思いおり先に行くかもとベッドに臥して
椀の底の飯一粒も残さじと痺れある手に箸を動かす
ピンを挿すリハビリ終えて心なし自分の文字が読める形に
妹は他人の三倍こなしたるリハビリの先輩負けずに我れも
声出さず一人ベッドで繰り返しパピポパポラルレロラロ
リハビリのバイク漕ぎつつ眺めおり男体山や白根赤城を

高 橋 耀 子☆ 埼玉

年女招福願い福は内豆まくたびに動く手あまた
袋菓子親に預けて二歳児は「僕の僕の」と節分帰り
一つずつ同じ動作に豆食べる六十年を共に生き来て
「何が好き」「おいしいものなら何でも」一人暮らしの聡き真央なり

笑むまひろ鏡の中でピースする白いジャケットぴったりだよ
一人暮らしのはざ間に来りて真央は帰る雪を踏みしめ
積み上げた雪に南天キンカンを群れの野鳥が取りこぼし行く

浜 田 はるみ☆ 埼玉

旅先で年上の友手首折る両手の手荷物多すぎた為
階段は注意するのにホテル内たった二段を踏み外すとは
目の前で怪我を見てからぞっとして我身の事と思いついてしまいぬ
介護資金不足の前に日本でも食料危機を予測する今
逃げ場なき世界紛争続くなか令和六年表紙絵輝く
真白なる月下美人のはかなさは物語秘め高貴に咲けり
大地震倒壊家屋多すぎて分断道路で救済遅れる

野 崎 礼 子☆ 埼玉

電車の塾の広告おもしろい桜より先に咲いてやろうよ
幸せは静かに喉を通りゆく五年物の梅酒甘くまろやか
ケイタイの文字自由自在に操ってリズムカルにメール打つ孫
駅前が高層マンション建ち並び良き武蔵野は遠い昔に
年だからそんな言葉は好きじゃない今でできることしたいと思う
次々と新語生まれる中国語時代と共に言葉も変わる
少しずつ赤き蕾が膨らんで春の陽告げる沈丁花
トゲトゲの心を癒すカフェラテ一人の時間静かに流れる

気の早き梅ほころびる冬の日に娘の個展幕を開ける
描きためた葉書大より百号の娘の絵画は不思議な世界
恒例の勝田マラソンコースとて画廊の前はひしめくランナー
完走のランナー数名寄りくれしと思いがけなし娘の報告
父母も兄弟も亡き故郷に十年ぶりなる帰郷を果たす
友の夫君「思い出の地を」とタクシーに案内しくるる変貌せる街
ヨーロッパのトラムの如き路面電車工業団地へ人を運ぶと

患える少なき髪を雪風に束ね手づくりの帽子にかくす
茨城に久しき雪の夕刻は融雪剤を庭先に撒く
チューリップ植えたる娘の書きし名札その文字消えたり時雨の中に
悲しい顔してほしい日もある娘どこから見ても笑顔の遺影
今日の糧に足るや二月の夕暮れを小さく黒くねぐらす鳥
ウグイスナ、フユナ、ユキナは小松菜の別名と知る市報の記事に
すいとんに玉子を入れて患える身に終戦の思い出の食
この梅の咲くころ病は癒ゆるかと小さきつぼみを空に見あげて
年の暮あまたの地にて火事多く人事ならぬ氣を引き締めむ
初歌集「さみどり」上梓おめでたう友の手腕が誇らしかりけり

わが部屋に集ひて呉れし短歌^{うた}の友幾とせ経ても変らぬ冬雷
師走には次男正月の準備せり新年あらためて家族が集ふ
大晦日長子と二人蕎麦を食むこの幸が未来につづく
ペランダにおのづと拝む初日の出その輝きに身を正しけり
短歌会退きたる吾に賀状来ぬ涙腺ゆるむあまたの友に
現代に欲して止まぬ偉人なりテレビに映る山出保氏^{やまだ たもつ}

親友の娘さんから頂いたシルバーカーは大変便利なり
寒中の風が吹く中ゼラニウムの小さく真つ赤な花がひらきぬ
大公孫樹は葉を落し切った枝々に刺のような冬芽をつける
大公孫樹は境内の狭い庭に立ち何の糧にて年々伸びるか
医院で生年月日と年齢を聞かれ答えれば完ぺきと言わる

謎めきて其でいて麗し表紙絵の月下美人に暫し見惚るる
案じたる友の声聞く小正月の夫も元氣と先ずは告げ呉る
偶然に義妹と会いたる美容室に隣り合う席へ案内されたり
難病の治療受けつつ小康の義妹の風格そのはに似る
語りくちのまるくなりたる義妹の言う理学療法士の得難き存在
同い年の義妹とわたしの干支末の芯は強きと目を細めたり
いちおうは健康躰を維持しつつ愚図愚図生きるわが身反省

年あけて自然災害空の事故令和六年恙なくあれ
はく息もま白なるこの寒さ水仙供花とす叔母の命日
うからやから久方ぶりに顔あはす一月二十五日叔母の法会に
寒水仙あまたの蒼ふくらみてその花咲くを待ちわびて居る
寒のうちとは言へ寒さ極まりてバケツの氷なかなか溶けぬ
ひと日中冷たい風が吹きつづけ底冷えの日は幾日もつづく
みどり有るはありがたきかなと思ひつつ家の巡りを掃くのは日課

林 美智子☆ 東京

丁寧に外皮むきて袋むき淡き黄色の文旦美味し
文旦の厚き皮と綿二個分を刻みて湯搔きてピールを作る
久々に友訪ねれば玄関に月下美人が三鉢も並ぶ
月下美人の花を知らずと我が言えはひと鉢呉るると約束嬉し
この夏こそ月下美人の開花見たし冬雷表紙に触発されて
友の飼う亀のラッキーはお昼寝中 自選のコースを散歩するとか
亀だつて長く暮らせば簡単な言葉は分かると友の言うなり
日野駅のはるか下なる信号脇で手を振る友の笑顔が見える
飼い犬を乳母車にておさな友元気ですかと訪ねくれたり
日常に幼友おり隠さない会話可能に救われおりぬ

石 本 啓 子☆ 東京

矢 野 操☆ 香川

ほし柿をコンビニの友へ好きなのよ両替たのみ笑顔いただく
コーヒーに烏骨鶏のゆでたまご朝の小さなぜいたくの時
妹の変わりなき声来ましたよ安心を得る無事故運転
世辞いわず言葉かざらずつき合い下手すくなき友にさみしくもなし

松 中 賀 代☆ 高知

節分を過ぎれば日射しも柔らかくチューリップの芽出そろい始む
暖かな日かと思えば凍り付く旧正月のころ一番さむい
週間の天気予報をたしかめて干し柿つくる用意ととのう
霜除けをとれば中からみずみずし結球白菜二列に並ぶ
摘みたてのナバナをさつと湯の中に青菜の匂いに深呼吸する
谷沿いの小径はいつしか落ち葉積み朝日が射せば水蒸気のぼる
大風に太枝おれた棕の木に泊まる小鳥の囀り聞かず
乗客は吾れ一人なり市営バス終点までを無言で無事に

本 郷 歌 子☆ 栃木

庭先を啄み歩く椋鳥を追いたてると雪降り始む
明日など存在するか在らぬか判らねど又明日ねと友に声掛く
あれこれと案じつつ冬の道歩く見上げる空は満天の星
黒黒とか細き枝まで凜として夕日に映える冬木立かな
泥落とし洗い上げたる大根の太さ白さを嫁に賞めらる

如月の半ばとなりて黄梅の一輪咲きたる春は来にけり
小煩く鳴き続けたる鳥なのか今朝軒下に冷たくなりぬ

村上 美江 岩手

新しき道を一步踏み出せば自づと次の一足出づる
懐かしい昔の歌を聴きながら彼の日に潤む声戻り来る
一月も早一ヶ月能登からのニュースに又もや吹雪く日本海
ゴーゴーゴー五時五十五分起床せり日は一日と明るさを増す
辛かつた更年期など忘れさせ朝を迎へる今日の嬉しさ
新しく肌着を求め義母の背も両足細く面影とほのく
嫁ぎ来て病の記憶数回と義母の元氣は吾を強くす
永遠に変はらぬものはなかりしを四十年経て歯科医院閉づ

永光 徳子 ☆ 東京

庭木切る乙女椿と山法師さんしゅゆも切り仏前に詫びる
亡き義母の植えたる庭木の数々にチェンソーの音迫り来るなり
年取りて近隣に舞う落ち葉さえ大儀となりて伐採決める
一夜明け切り株見れば樹液あふれ生命力に胸を突かれる
切り株に日本酒注ぎ労いて氣持切り換え草花植える
春の日は庭の隅まで降り注ぎプリムラの苗立ち上がりいる

伊澤 直子 ☆ 東京

文豪に親しまれたる山の上ホテル旅館の報に食事を予約す

入り口を一步入ればクラシカルなロビーと調度が迎えてくれる
焦茶色の壁や柱と廊下にも芥子と紺の陶器のあしらい
伝統と記さるるマカロニグラタンとババロアたのんで心も満ちる
一本の蜘蛛の糸に紅もみじ点点と絡まりくるくる回る
ベゴニアの折れたる茎を新しき鉢に挿し芽し室内に置く
雪降りて冬枯れの枝に白き花咲かせるがごと夜空に浮かぶ

乾 義江 ☆ 茨城

無常にも雪となりたる災害地斯かる能登半島身につまされる
我が居間の我が定位置に外見れば冬空のなか鳩の飛びゆく
肺から脳にふたたび大腸と間を置きて手術の続くせつなし義妹
大きな照明カバーの手に負えぬ頼りになりたりシルバーセンター
六千人に一人の難病とふ八代亜紀何と不運な演歌の女王
南東の庭の片隅に日差し受け喇叭水仙青く芽を吹く
必要か無駄か分からずに冷える夜は水道水を細く出し置く

稲津 孝子 福岡

口の中に残るトマトの皮を皿に出してをりにし姑おもふ
通勤に娘の通る湯島天神の八重の白梅はや咲きをらむ
ラーメンを食べたく母が鍋もちて買ひきてくれき七十年前
卓の上に母の置きぬし犬棒カルタ歩きつつ諳ず絵札おもひて
歌のどち集ひし常寂光寺の楓の庭に育ちて歳月経たり

入試の為また一年勉強する娘夫は一年一緒に暮らせると言ひき
大学の入試に三年かかりし子にまだあと一年待つ積もりと夫の言ひき

戸部田　とくえ　福岡

雪の舞ふ道を一人あるきつつしばしめぐらすまれなる風情
松の苗なぜか買ひたく手にしつつその厳かさ離せなくなり
寺の鐘ききつつその音しみじみと身にしみわたるただ無となりて
七草粥炊きつつ匂ふその風味ただよふ湯気の限りもあらず
対談の人の姿のみえねども声に人柄ラジオ聴きつつ
チューリップとりどり挿せる玄関の華やぐ鏡に姿勢正しぬ
見るほどに親しみ増せるチューリップおもはず背筋のばしたり

吉　村　昌　子　千葉

豆まきが終りたる後も雀達わが家の前の電線に並ぶ
五線譜の様な電線その上を白雲がゆくゆるりゆるりと
電線の雀が一羽飛び行くとすぐ皆飛び行く同じき方へ
メモをする手帳の上に花びらが一ひら二ひら止まりてくれつ
黄の蝶がもつれつつ飛ぶそのめぐり桜が舞へり小さき風に
うぐひすがどこかで一声鳴いてをり桜見上げる吾に答へて
わが空をゆるり西へと行く雲のもう茜色きざしてをりぬ

大　塚　照　美　兵庫

入院食けふより始まる昼御飯わが家の及ばぬ一汁三菜

除夜の鐘きこえはじめて眼閉づ病室にて迎ふ八十八歳
あら玉の年のはじめの病室に並ぶまぼろし七福神の
われのみのリハビリ廊下を十往復逝きし夫の部屋あたりまで
遠く住む友らの恙ありなしを年どしに知る賀状の数行
人の名を覚えきれずにごめんなさい看護スタッフリハビリの先生
忘れ物の確認をへて病室出づかのとき夫の迎へありし退院
久びさの外気を吸ひて退院の玄関先に浴ぶ冬の陽光

井　上　楨　子　新潟

買出しの昼に寄りたる回転鮎孫ら遠慮しつつも皿高く積む
本堂に年の回忌の札を貼る息子を手伝ひ歳晩暮るる
窓を打つ夜更けのしげき雪霰一月尽に何をさびしむ
供物にと柿を長年持ちくれし老い亡き家に熟す様見ゆ
略式の法会いとなむ副住職は輪廻転生明快に説く
循環系に名を馳す名医の御蔭とぞ夫は救急隊の気転をまた言ふ
夫の食む減塩に付き合へばわが血圧は正常値となる
看護師のつけたる香水のしるき香を入院の夫は初めてこぼす

吉　田　佐好子☆　茨城

受験子を門で待つ親続々とフラッシュモブのように現る
受験子の服装チェック学ランは時代の流れ絶滅危惧種
制服のスカート短く脚長しジャージを履いて寒さ対策

見上げれば何十階もあるだろう大学建て替え巨大なビルに
英単語入ったロゴの服はだめガムテ貼られた受験子もあり
数多なるマスコット付ける受験子のバックパックにお守りはなし
受験時期本気で変更考えよ天候・感染問題多し

鈴木 やよい 東京

五分ごとのスヌーズ設定鳴りくれど目覚し抱へてその度に押す
冬枯れの葉を残しおきたる風知草冷たき朝に根元より切る
夕暮の橋の下にて練習かトランペットの音は時をり外れる
鳴り響く夜の踏切あくを待つまばらなる星遠くにみつめて
外灯の光に現る吾が影は何を悩むか俯きて歩む

ブラインドを巻き上げ眺む初雪はめまひしさに激しく落ちくる
新聞はいつものやうに配られて初雪に沈む足跡のあり
葉を巻かぬ白菜畑に残されて思ひのままに広がりてをり

中 島 千加子 東京

今日のそら青く綺麗と語る手話ひかりのいろの蠟梅香る
高尾山の梅はいよいよといふ画像送られてくる花芽の多し
陽の粒子とけこむやうな青空の下には梅の膨らむつぼみ
誕生日すこしだけ過ぎ早咲きの梅が咲き満つ嗚呼帰れない
木の枝の隅から隅まで咲く梅の花ひとつひとつに呼ばれる心地
梅のそば長居しすぎの翌日のけだるさ心地よくまどろみぬ

丁寧語が気さくな言葉に変わりゆくフェイスブックのメッセンジャーに
駅前の広場に鳩が戻り来て首を傾げて餌ねだりくる

山 本 三 男☆ 群馬

俺だってコロナにかかると言う兄の電話の声は元気が戻る
捨てられる卵の殻も自然なら何かに還るものであらうに
街中の大型スーパー閉店し装飾のなき建物残る

カーテンを開ければ春の光満ちそのまぶしさに心はひるむ
このころ春先のうつとつばやいて土蜘蛛のように潜んでいたい
しゃべるのは嫌だし体操嫌いだし老人クラブは遠慮しておく
妻もまた東京暮らしの過去を持ち渋谷のことなど話すことあり
丁寧な聞き手の問に対応し藤井壮太の解説やさし

中 村 哲 也 宮城

明日五日東京都心で八センチ降雪予想に注意飛び交ふ
宮城県以南は特に降雪の多きニュースは稀とぞ思ふ
五日朝関東地域の会社より続々届く午後休業と
降雪に荷物は明日に届かぬを集荷の業者等口々に言ふ
長野より大雪翌日荷物着き驚く業者と顔を見合はす
大雪にまつたく荷物の届かざる営業所もあり七個はましか
積雪に東京都内は転倒で怪我せる人は百人超ゆと
この辺に有ると思へる近隣の電話ボックス悉く消ゆ

二月号作品一評

小林 芳枝

三階の更衣室までの昇り降り階段つかふ体力まだあり 桜井美保子
三年振りに再開した水泳のようだ。現在の体力を確認しながらしつかりと自信を深めてゆく姿勢がみえる。

一年に一度の検査オールA根拠なき自信打ち砕かれる 斉藤トミ子☆

山登りを楽しみ体力に自信を持っていて検査にも異常はなかったのに急な病で入院になり戸惑うばかりであろう。今まで培ってきた体力で乗り越えて欲しい。

朝々の厨にレタス刻む音鼓動の如く今を生きおり 糸賀浩子☆

娘さんを送ったばかりなのに重い病と闘うことになった糸賀さん、朝のレタスを刻みながら明るく生きる姿勢は健在であるが下句に胸中の思いが詰まっている。

隣家の稲刈り終わり小雨降る機械も人もくつろげる雨 松中賀代☆

稲刈りが終わったという安堵感ほかに

大きいものがあるだろう。終わった後に降り出した雨が収穫作業に精を出した人だけに でなく機械にも休息のときを齎しているように詠まれていて結句が優しい。

あまりにも忙し過ぎた歳月を忘れさせるか風の止む庭 村上美江

昨年、第一歌集『さみどり』を上梓されたばかりなのでその忙しさもあるかと思われるが風の止んだ静かな庭に救われているようなひと時である。東日本大震災後の苦しかった日々を今だけは忘れたという思いも感じられる。

横歩きしながら探す店内に昭和の雑誌の表紙の笑顔 永光徳子☆

古書店で何か本を探しているのだろう。そう云えば昔の雑誌の表紙には女優さんの飛切りの笑顔があった。古い本の中でも目立っていて懐かしかったのだろう。初句の「横歩きしながら」に古書店の風景が上手く表現されている。

ひとり住む我が夫が遣はしてくれたりや床に動かぬ守宮 稲津孝子
亡くなった人の化身かと思うのではない

く自分の為に遣わしてくれたのかもしれないと思う気持ちが切ない。とても優しい方だったのだろう。

夫居らぬ寺の境内木枯しの吹きつぎ落葉に厚く覆はる 井上楨子

住職と言う重い職に就いている夫の急な入院はどんなにか心細いことだろう。木枯しに吹き飛ばされながら庭の隅に落ちて溜まってゆく枯葉は、混乱している作者の頭の中のようにでもある。一日も早い回復を遠くから祈っている。

畑中に非正規用の駐車場工場までは少し離れて 山本三男☆

大きな工場のようなだが散歩中の嘯目だろうか。畑の中の非正規用の駐車場を見ながら僅かな社員の格差を感じている視線が鋭い。

上野にて公園ベンチに焼そばをそくさ食ぶる東京に来て 中村哲也

どうしても見たい絵の企画展があったようだ。仙台から上京して時間を節約するために急いで食事をする背景には忙しい日常がみえる。真面目な勉強家である。

二月号作品一評

藤田 夏見

ためらひつつキックを打てばOKとインストラクターの目が吾を見る

平泳ぎのキックにも形が。水泳の出来る作者も不安は隠せない。インストラクターの初心者への目配りに作者の安心と次の動作の自然な動きが見えるようです
黄昏は人恋しくてスーパ―の人混みにさへ孤独の深む 田端五百子

日ごとに黄昏時が早くなると何故か不安な気持ちになるものですね。スーパ―の人混みの中で寂しさに襲われた作者。人混みにさへが孤独感を際立っています。

酒飲めば越中おわらの歌うたふ酒造りの家に生れし亡父は 野村灑子

越中おわらの歌は杜氏歌に似通っているのかしら、と思いいながら酒造家の大きな酒蔵という空間に生息する酒母菌は越中おわらの歌と共に、そこで生まれ育った父上の生涯に馴染んでいたのではない

か、と筆者は思っていました。

かりんの実の黄に染まるころ下妻に見舞かなわす叔父の訃を聴く 正田フミエ☆

家族葬が世の流れとして一般的になりました。叔父様とのご縁の深さにそれを受け入れられない作者。かりんの実の黄に染まるころが印象的です。

ホットケーキ五時に食して七時なる夕食もまた満足を得る 飯塚澄子

久しぶりのほかほかの作りたてホットケーキは身体全部が喜んで二時間後の夕食も完食した作者。人間を癒すのはやはり、人と食が最強ですね。

終活をせねばならぬと強く思う病みて臥せれば皆不要なり 斉藤トミ子☆

突然の病気に臥せていると何もかもが不要と思え、終活をせねばとの強い思いが湧いたと詠まれた。心情のよく伝わる歌です。三句目「強く思う」は作者のもつとも言いたいところだが一首の歌としては念押しのようにで惜しいなど。快方に向かわれることを祈ります。

隣家の稲刈り終わり小雨降る機械も人もくつろげる雨 松中賀代☆

雨喜びとなった隣家を思われている。

ことさら雨の少ない年だったが、稲や麦の収穫時の雨は農家にとっては一大事。無事に稲刈りを終えたあとの雨に安堵する人のみならず機械にも注ぐ眼差し。

鳩居堂季節の花のその葉書あんじてやまぬ子に便りせり 戸部田とくえ

子供は飛び立っていくと知りながら、作者には気掛かりでならないことがあるのだろう。自然な形を装って季節の花の絵葉書の便りを出したよ。と母心が覗く手術後の夫の力なき物言ひに寺守りゆく厳しさこもる 井上楨子

夫居らぬ寺の境内木枯しの吹きつぎ落葉に厚く覆はる 同

生まれた家の生業に、真摯な夫を支える作者の気持の揺れ動きを素直に詠まれていることに惹かれます。以前の寺の境内の落ち葉を掃除する住職である夫の歌を思い出します。気丈に振る舞い寺を守りながらも心細さを隠さず詠まれた歌。

四月集

石 渡 静 夫 ☆ 茨城

ストーブを点けても手先悴んで書きものできず書類の整理
雪の夜のしじまの中を鳴り響く雷は告ぐ大雪来ると
一晩で積もれる雪は三センチ子らの歓声微かに聞こゆ
午後九時の空に旅客機次々と轟音響かせ羽田へ向かう
スーパールの奥に積まれる缶ビール限定出荷のラベルに惹かる
吾が心映しているか白梅は踊っているよう晴れたる今日は
コロナ禍を経て再開の新年会参加者笑顔で話は尽きぬ
新年に相応しい曲披露する九十歳の伸びやかな声
目が合えば小言の絶えぬ妻なれど不在のときはちよっぴり寂し

須 藤 紀 子 埼玉

ただ一つ実る蜜柑を採らざれば野鳥啄む寒入り過ぎて
川岸に黄の色灯す福寿草義母が植ゑしと言ふ人を見る
悉く丈詰められて鳥も来ぬ庭木に下がる紐の揺れをり
嘗てここに聳えて在りし合歓木の切り株低く朽ちて残りぬ
枯るるとも新たな芽吹き始むとも語らぬ木々に春の雪降る

殺されし子らの映像絶え間なくネットに流れ来ガザの虐殺
殺すたと書きたる札を掲げつつ凍える夜に立つ人のあり

植 松 千恵子 静岡

仏壇の虎屋の羊かん七日過ぎいつ下げるかと夫は気にする
寒の入りにはふはふは毛布購ひて今夜はふんはり夢の中へと
なつかしや「秋刀魚の味」をテレビに見て会話のやり取りに昭和を思ふ
初釜の茶道の師範の一礼は紙たたむやうに美しき所作
一月二日の空港惨事死者もなくミラクルと絶賛す海外報道

川 俣 美治子 ☆ 栃木

雪被る北の山々くつきりと見えて辺りを寒々とする
節分を過ぎて日差しが少しずつ春に向かうを感じる日だまり
我家から見える風景変わらねど柔らかくなる立春過ぎて
雪の後の庭に一輪クロッカス小さけれども黄の色強く
あぜ道を寄り添いながらゆっくりと人と犬行く曇天の午後
窓際でたっぷり陽を受けるシクラメン今日も元気ねと声かけてみる

山 本 述 子 神奈川

紅白の梅の揃ひて咲きをりぬ懐しさにて涙の出さう
夕暮れに香り漂ふ梅の木に「お帰りなさい」と言はせをりたり
久し振りの台地登りの急坂のウォーキングに息のあがりぬ
しんしんと雪降り積もり一面の銀世界にて心静もる

冬の夜は暖かくなる鍋料理地場野菜に地魚加へて
連休に河津桜のほんのりと二・三分咲きて人ら寄りくる
飼ひ兎餌をねだりぬカタカタと器鳴らして柵ノックして
柵の外跳びつ走りつ喜びて時々髭をすり寄せてくる

豊田 伸 一 ☆ 茨城

大部屋に移って響く大いびきに心配事を一時忘れる
寝返りの身の重たさに驚きぬこんなに力を失いしかと
朝食の味なきおかゆに感謝して他はムリでもこれだけは食べる
看護師がカーテン開ければ青空が見えて迎える朝は静かなり

佐藤 幸子 山形

納棺されたる義兄の顔の口辺に義姉は煙草とマツチを置きぬ
涙して夫の棺に釘を打つ義姉の介護の三年を思ふ
火葬点火を了承すればうやうやしくボタン押す係の白き手袋
まだ熱き火葬終へたる義兄の骨こころ宿さぬ真白きを見詰む
早世の娘に代はる孫嫁の段取りの良き引物裁き
棒鱈の煮付け旨しと褒められて口元滑る秘伝の味付け
保健所の認可「菓子」「漬物」「密封包装」受けて働く七十六歳の挑戦
定年のなきわが仕事の帰り際二つ星光る西の空見る

藤田 夏 見 ☆ 広島

タッパーを自転車に積み「味噌下さい」ひと月ごとの孫のお使い

寒の水まだまだ含む黒豆かバケツの中に盛り上がり来る
庭に出すふたつの羽釜に豆を炊く今年の味噌は大寒仕込み
強火には針葉樹の薪とろ火には広葉樹を焚べ豆炊く羽釜
来年も一緒にと言う孫ふたり味噌作る手の頼もしくあり
フライパンを五徳にのせて煎る豆のパチパチはじける匂いを放ち
祖母挽きしきな粉あふれる石臼に幼きわれは豆を入れたり
石臼は漬物石となしており祖母とうになし家仕舞う頃は

児玉 孝子 ☆ 愛知

母さんの笑顔に励まされいると届く賀状の文よみ返す
「津波です逃げて下さい今すぐに」アナウンサーの強く繰り返す
日航機の小窓に焰の燃え移るに祈り見詰める乗客の無事
親族寄り新しき年を祝ぐ今宵孫は結婚すと良き人連れくる
老いらくの独りに迎う鏡開き健やかにあれと小口に餅食む
練習を重ね一年立つ舞台これが最後と不思議な余裕
ライト浴び「大和路の恋」揃い踊る拍手に今日の大喜び

藤田 英輔 ☆ 高知

庭に立つ五本の内の一本に花を忘れた梅の樹の在り
祖父として笑顔絶やさずシングルと決めた娘と孫に向くとき
朝遅く起きくる赤児に飼ひ犬の声は次第に安堵の響き
町にある図書館に絵本を借りに行く娘と孫の愉しみのとき

使い捨てカイロで冷えをしのぎ居り「言葉が大事」とテレビの云う夜
晴れたる日傘を通して見る空は雨の日のごとく暗く悲しき

江藤 ひさ子 大分

登録選手は四阡三百六拾八人とぞ別府大分毎日マラソン

マラソンの応援に立つ群衆の頭上を舞ひ舞ふ鳥の大群

走りゐる選手も聞くか第一走者ゴールの花火二発三発

もうこれが最終走者かと待ちをれば間を置きて一人またひとり来る

左折する車待たせて携帯電話見つゆつくり歩く男性

治療待つ歯科医院の窓いつばいに夕陽に染まるうろこ雲の群れ

「けふ夕食は作らないでね」と隣よりうなぎのお重下さる電話

小林 貞子 山形

大寒の飯豊嶺の雪減るらしく尾根筋黒く頭となりぬ

節分の鬼らはこよひ弦月の光を浴びて飲み明かすらむ

春立ちぬ芽吹きのかぬれ赤帯びて日永の空に淡く煙れる

玻璃越しの雪一片に目眩く上下横への浮遊を追ひて

さらさらと屋根滑りゆく雪の音塗料の効きに心安けし

如月の里山の雪早も消ゆ猪は百合の根掘り荒らすらむ

丈低く茂る「ナニワズ」小き葉に小き荅を秋より抱く

「ナニワズ」は沈丁花属頭状の黄の花咲かば高き芳香

吉祥草細き葉叢は風に立つ去年の円ら実地に散らしつつ

二月集／残響集評

ブレイクあずさ

年齢に相応したる仕種見て笑みを見せ
をり理学療法士 益坂順子

前屈も片足立も基準値を超えて測定結
果に笑まふ 同

療法師の視点の一首目と作者の視点の
二首目を「笑み」で呼応させる工夫が楽
しい。年齢というデータのみから想像さ
れた測定結果。それが優秀な方へと大き
く裏切られた時の療法師の驚きやいか
に。そして作者の屈託のない自負にも思
わずニヤリとさせられる。

赤赤と沈みゆく日を追ひかけて中空を
ゆく半月白し 本間志津子

沈みかけてはいても太陽にはまだまだ
力強さが残っている。「赤」の重なりが
それを伝える。対照的にこれから夜を見
守る月は「白」く、静かなたたずまい。
天空の光景が印象的に詠まれた。

十三の峠を結ぶ道古りて人馬の往き来
遙かとなりぬ 小林貞子

歴史的な事項を取り上げる歌は、盛り
込まれる情報量の多さもあって単なる報
告に終わってしまうことがある。そこに
は驚きも感動もない。しかしこの歌の結
句には作者の詠嘆がしつかり込められて
いて、その場実際に立った人の姿を見
せている。

猫の医者も吾の主治医も言葉の後に同
じこと言ふ「加齢ですネ」 東 ミチ
健康に問題があつて助けが欲しいの
に、加齢の一言で片付けられてしまうと
は。それでも「ネ」の軽さがそんな情け
ない気持ちにちよつと救いを与えてい
る。猫と作者を並べたところにも作者の
ユーモアのセンスを感じる。

家々の遠く広がる地平より昇る満月余
裕の姿 須藤紀子

小高い山だろうか。はるか向こうまで
見渡せる場所において月の出を待ってい
る。上句の丁寧な描写が歌の舞台に大き
なスケールを持たせた。「余裕」との表
現にも説得力がある。

物音がすればすぐさま振り向いて猫で

はないか帰って来たか 石渡静夫☆
四句五句での話し言葉への鮮やかな転
換が歌に命を吹き込んだ。姿を見せぬ飼
い猫を案じる人の、泣き笑いにも似た表
情、声がありありと想像できる。

どん底の誕生日けふ教会の柎にほふ今
年にもほふ 内垣米子

誕生日が最悪の一日になってしまった
とは。でもうつむいた心が柎の香りに
ふつと癒される。そして今年もまた誕生
日を迎えられる幸運を思い出している。

冬来ればリアスの海に鱈の群れ朝方三
時に快音聞こゆ 松崎みき子

東北の冬、早朝の漁港の情景が生きて
きと詠まれている。豊かな海の恵み。そ
れを再び受けることのできる喜びが結句
に伝わってくる。

湯に浸かり「北風小僧の寒太郎」孫に
歌つて冬を分け合う 片桐美穂子☆

寒い晩の祖母と孫の語らいの温かさ。
「冬を分け合う」に味わいがある。寒太
郎！ と言う幼子の得意げな合いの手が
聞こえてくるようだ。

残響集

水澤 タカ子 山形

ゆつくりの揺れは続きてビルさへも傾き並ぶさま痛々し
母と子の穏しき暮らし一変し子のみ残さる能登の地震に
瓦礫のなかを雨水飲みみて保ちしとふ命を語る媼に安堵す
長びける避難暮らしに体調を崩さぬ術をつづけよと祈る
被災者に公営住宅・ホテルをも用意せりとふ山形県知事
能登に行く応援隊を見送りぬ歎きを共有し明日を目指さう

松崎 みき子 岩手

パソコンの使い方未だ解らずにストレス感じ首をまはせり
北側の窓から入る二月の陽昨日より今日はどことなく春
普段着を得意げに着るわが居て野の斜面にはふきのたう出づ
浅瀬では座礁する船「いぐなよ」と祖父は教へき舵きる父に
冬越しの人参畑より掘れば腐りもせずに赤々と手に

笠岡 文子 ☆ 広島

能登地震の教えを胸に逃げることに持ち出すものは一つの命
寒の日の男子駅伝の石川県に励ましの拍手がんばれの声

家にこもり言葉は涸れて出てこない感性おとろえ行動出来ず
ねむれずに不安増す夢うつうつと氣力落ちこみ春はいずこに
本読みも視力弱まりままならず本をしぼりて塵に出しおり
売りました二百円なり寂聴訳源氏物語全十巻を

金子 八重子 ☆ 千葉

擦り切れたスニーカーなれど捨て難し日々の迷いを語りし相棒
ホイル焼き開ければトロトロ太葱の甘味の増して味噌ダレこんがり
パソコンで二ヶ月かかりて職探す喜寿なる友の見上げた根性
三ヶ月存分休みて一番にしたき事とは働く事なり
職の無き日々は脱け殻奮起して年齢不問の就活アプリ見る
雪載せて寒椿の枝撓り居り真白の中に映える紅
道端の三日目の雪に踏み込んでまるめてみたり子供のように

井出 裕子 静岡

「親不孝を詫びたかった」と被災地で崩れた我が家見つめる若者
政治家ら釈明と保身に懸命にして被災地の復興なほも進まず
教室に児らの姿と笑ふ声学校再開に「希望」の見える
高齢者の多き体操教室寒期閉ち立春待ちて再開すなり
立春過ぎて新年の挨拶交し合ふ「中国風だね」と笑ひ溢るる
久々に体動かすは心地よし明日の筋肉痛気になりつつも
体操の合間のお喋り華やぎぬふた月の無沙汰埋めるがごとく

(☆印は新仮名遣い希望者です)

過去回想の助動詞「し」の誤用・慣用について

『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(2)

—『慕何雜詠』を読む—

大山 敏夫

歌集『慕何雜詠』は新書判本文80ページの1ページ五首組みで、表紙はやや厚めの紙を濃茶の布地で包み、自筆の題字を金箔で押している。見返しも表紙に合わせた薄茶を使い渋い装幀である。この歌集には目次も奥付もないことを書いたが、当然のように作品の発表年などの記載もない。幾つかの塊に別れているのだが、掲載も制作順でもないようだし、歌の背景を知りたくとも推定に頼るしかないという、読者にきわめて不親切なものとなっている。

巻頭の一連は総数三十二首あって、母をうたいしもの、子をうたいしもの、その他に自身の日常をうたいしもの様々だが、子供が幼いことを思えば、作者自身も若い日のことだろうと思う。

いざゆかむ蛙鳴く音につくづくと吾を待つ母のさびしからむに

と母を思い、

息の「あとがき」には、

「父、在東京、著述業」と言ふのが小学一年以来、私の諸調査書に記入された彼である。

ともあったが、太田行蔵には国語や文法の書だけでなく、キャンプや登山の手引書まであるのだ。

日本の登山の歴史という観点から見ても、太田行蔵の教鞭を執っていた信州はその先駆的地域であった。長野県立女子高等学校が明治三十五年から始めた戸隠山登山が、その先駆けともいわれ、島本赤彦も明治三十八年に女学校の生徒を引率して霧ヶ峰に登った時の記録を残している。そうした空気の中で、太田行蔵も登山やキャンプの夢を羽ばたかせて行ったのかと思う。

「父、在東京、著述業」は、東京での教職の傍ら本格的な登山の手引き書や、楽しいキャンプ生活への入門書の出版に情熱的に取り組んでいた状況を意味している。その一つ『憧れのキャンピング』という本を開くと、歌集の中にある、

甲斐の国夜になるころの山々の色をつくづく見つつ来にけり

南ア山塊を庄してさがれる雲の群ところどころは夕日に燃えて

の歌などは、この書の取材時の作品かもしれないと思わせる。書では、山に登りキャンプする前に田舎に寄り、子供と遊んだ日のこと書かれていて、「子供はいつも楽しげであ

あどけなく子が物言ふを聞くときしいかなることみなさむと思ふ

かにかくに親のまにまに生きてある幼き者を見ればかなしも

ひとりごと言ひつつ遊ぶ幼子よ思ふこと汝を越ゆるすべなし

という子を愛し、慈しむ作品も多くほのぼのさせられる。

くにの子がよこす手紙のかなちがひ拾ひつつ思ふそのあけくれ

この背景ですでに子守りを卒業して作者は東京に単身出ていたのであろう。

かねの工面いささかつきて生徒らに今日はやさしく物言ひにけり

子どもたちに一粒の麦も運ばない父親だったというが、生活は苦しく借金などもあったようだ。そして、

勝手なこと自分のことばかり言ふと言ふそれよりほかに何の言ふことがある

と開き直ったりもする。「俺の生活を批判するやつは、おれの敵だ」と言つて憚らなかつたようでもあり、

かかるとき人は煙草をすふならむかにかく心しづめむとして

としんみり反省の姿を見せたりもする。正直言つてあまり好きなタイプの人柄ではないものの、憎めない一面もある。子

る。いつも子供の相手をして、かうして大きな景色を見せに連れ歩いたら、どんないい影響ばかり受けて大きくなるだらう。」つて甘酸っぱい思いを綴るが、結局は最後に、

ひとりあそび。私は家にかへると、また、私のひとりあそび——キャンプの用意をはじめた。

と締め括っているのが、やはり太田行蔵らしい。昭和六年刊行の書である。

この『憧れのキャンピング』に先行するのが『登山』という本で、共に健文社が刊行した。『登山』は昭和四年に発売されると忽ちに「五版」(重刷五回)を数えた売れ筋だった。装幀も共通する青い表紙に丸背の上製で、金箔で題名著者名を押している。共に口絵写真が豊富に使われ見た目にも楽しめる仕組みになっているし、共に巻末に和歌や短歌が多く紹介されている。これら紹介されている作品についても、「し」に関連するものがあるので、また別の所で考察することにして、話を『慕何雜詠』に戻す。

そして、四首目の「し」の用例が出てくる。

④明日の朝飲めと言はれし水菓を夜半にすこしなめてみにけり

この「水菓」が何なのか分からないが、継ぐ作品が、
検尿の日なりなるべく澄ませむと林檎を一つ余分に食へり

であるから、健康診断のようなもののある前夜だったのかも
しれない。さて④の歌だが、これも作者自身の行為体験を言
うものなので「○」でよいかと考える。

次の一連は総数五十三首というもの。作品群から受ける印
象は容易ならざる厳しい「戦局」である。頭の商品から「し」
が多数あらわれる。

⑤爆弾にやられぬ工夫をおもひ居し磨硝子戸ににじむ青
空

⑥おろかしき癖とやめむと思ひつつ今日も並びし国民酒
場

⑦いろいろの花つぎつぎに咲く四月大森を去る十年を住
みし

この三首、いずれも自身の行為であり体験なので「○」で
ある。⑤の上の句が如何にも戦時下を思わせ、下句からは
ガラス面にバッテンに貼られたテープの様子等も目に浮か
ぶ。⑥の「並びし」が体験を反省して振り返っているのか、
現に並んでいるその時なのか分からないものの、国民酒場に
並ぶのは酒の誘惑からであり、「癖」とあるのは、その行列
があまりに長く、滅多にアルコールにまでたどりつけない状
況を知りつつ、期待を込めて「念の為に並び」行為を「癖」
と言ったのかと思う。この「国民酒場」から背景は昭和十九
年のこととなる。国が打ち出した「決戦非常措置要綱」にも

われは若くて

というのがあった。太田行蔵の娘だと名乗る方から、かつて
聞いた話だが、幼いころ、よく母親から「トウチャンに手紙
を書け」と言われて出したという。太田が土屋文明とトラブっ
て教員を辞める時があったが、「あれからウチは貧乏になっ
た」とも語っていたそうだ。さて、この⑧の作品も過去回想
としてきちんと使った「○」である。

疎開先は、長野であった。

山裾のかさなりかすむ伊那の谷父母はかしこに育ちた
まへり

と歌う故郷の伊那谷を遠くのぞみ、
白骨の出で湯にかよふ谷の道すみれの花のさかりなり
けり

と歌う白骨温泉（松本市）も近かったようだ。

新聞紙を食卓としてつましく疎開の村に住みつかむ
とす

と歌い、しっかりした覚悟も当時の生活も垣間見える。そし
て「し」の用例三首が並んでいる。

⑨子の下駄をはけばすぐその歩きつき身にしてみておぼゆ
兵にゆきし子の

⑩ゆまりしてかへりきし子にたづねけり虫の鳴く音はし
つつありやと

とづき、飲食店、劇場などがすべて一年間の休業となった。
その結果抜け穴のように小規模な「国民酒場」が発生したと
いう。⑦の結句の「住みし」は、連体形の終止的用例である。
東京の大森に住んでいたのであるが、空襲などを恐れて疎開
を決めたのであろう。子どももいたようだ。

まづわれに一つくるるか配給の菓子を買ひきて汗ばめ
る子や

宿無しの親子となりてひとの家に夜明け咳する子をか
なしめり

どうやら同居しており、ねんごろに面倒を見ている良い関係
がうかがわれるものの歌集の「あとがき」にあった「子をう
たいし歌」の記述に沿っていない。

それにしても太田行蔵の作品には、母をうたいしもの、子
をうたいしものは多数あっても、「妻をうたいしもの」が全
くと言えるほど無い。前述の『憧れのキャンピング』の中
の子供との絡みのエピソードにも、その子の母親のことには
触れていない。

ひとりの日妻子が知らぬ父母や妹偲びてゐることもあ
り

これも直接に「妻」を歌ったものではなく、言わば脇役の
脇役的である。太田行蔵にとつて「妻」とはどんな存在であっ
たのであろうか。ずっと後になる回想の一首に、

⑧子がわれをトウチャンと呼びしころを思ふ子は幼くて

⑪老いて子にしたがふことのうら安さ誘はれて来し松か
さひろひ

上の子はすでに成長して出征しているようである。⑨は、
昔を思い出していることから「○」となる。⑩はつい今しが
た小用から戻った子なので、自身の行為とは言えず「×」か
と思う（「かへりきたる」か）が、人の行いの事なので「△」とし
て完全なる間違いとはしない。⑪は、自身の行為体験なので「○」
であろう。この「松かさ」遊びは子どものお気に入りなので
あろうか。以前の子守の時にも歌われている。

⑩の歌で「きし」と歌い⑪で「来し」と表記している。こ
れだと⑪の方も「きし」と読むのかも知れない。「来し」を
キシと読むかコシと読むか、好みもあるようだが、文法的に
は「力変」の活用は「こズ・きたリ・く・くるトキ・くれバ・
こヨ」と変化するので、その連用形が「き」なのだから「き
し」という連体形が生まれる。ゆえに「きし」が正しいとな
るが、現実的には「こし」の選ばれる方がやや優勢のようだ。
古くは、「来し方」を「きし方」というとき、時間的な意
味での「過去」を意味し、「こし方」とすれば、空間的な意
味で「通過してきた場所、方角」を指したという。のちにこ
の使い分けが崩れて、どちらの意味でも「こし方」で表され
るようになった、らしい。

太田行蔵は「きし」と言っているので、そこに「時間的な
意味」を重く含めていることになる。

⑫ いやしめて思ふになれし英米の物質文化につひに敵せざるか

鬼畜米英とか言つて国民を煽り戦っていた中で、潤沢な物質からなる文化の強力さには「卑しい」として反撥を企てても凌げるものではなく、力つき、もう敵わないと音を上げる時が来たのであろう。この「し」は、その発端となった時からかなりの月日が経過していることでもあるから「〇」で良いのかと思う。

ガンとやる術なきものか至近距離に迫りて艦砲射撃すといふに

の歌が続く。兵器や砲弾不足から至近距離にあるとしても反撃できない国情を嘆くのみ。

⑬ 無難なる生活求むる者の群を教育者と呼び来し今のたたりか

これも⑫の作品と同じで、呼んできた時間的経過があるので「〇」である。

夜に入りてなほ火の色のさめぬ空横浜なりと人等はいへり

夕立の雲のごとくも焼くる町の煙は空をおほふなりけり

都市を標的とする空襲も多くなり、かなり遠方であっても生々しく夜空を焦した。佐藤佐太郎の歌に、

戦^{たたかひ}はそこにあるかとおもふまで悲し曇のはての夕焼

というのがあがるが、気持ちに通うところがある。人らは追い詰められて余裕をなくして荒む。

乗りおりにわめき合ふほどの民にしてこの大き戦に勝つべきものか

国際のこのつまりは鉄火もて争ふほかに道はあらぬか

そしてついに「×」の付く口語の「た」に置き換えられる「し」の用例に遭遇する。

⑭ 日の入りし山の静けさ金色にうしろの空も雲も燃えつつ

これは今しがたの日没を言う。「日の入れる」が良いかもしれない。これまで見てきた十四首の中で、完全なる間違いと言えるのは、この「入りし」が初である。

「し」ではないが、終止形の「き」を使った歌が二つ現れる。米も麦も自由に買はるる時にすら苦しみまじきわが父

母は

特攻隊の乗用機作りつつ工具等戦局観によどみなかりき

前の歌は過去回想なので〇だけでも、後ろの方は、「よどみあらざり」の意味なのかと思われる。《統》

冬雷ホームページを見よう！

画像は《WEB冬雷》です。ここからは冬雷最新号と、四斗樽庄縮版、作品年鑑二〇二二年版をPDFで読むことができます。



ネット歌会に参加しよう！

今一番活発に動いているのはネット歌会です。冬雷会員ならどなたでも参加できます。画像の中の「冬雷ネット歌会」のボタンをクリック。

ネット歌会は毎月行われます。参加者はその月に掲載された自身の作品から二首を選び、担当の桜井美保子氏に申し込みます。詳細はその折に確認して下さい。

冬雷二〇二三 作品年鑑 合同歌集

継続刊行の七年目をめざす標記の企画ですが、現在参加希望者数は「96」名となっています。たくさんの方の皆様にご協力賜り、感謝申し上げます。編集部では七月の出来を定め進行しておりますが、次年度へ継続のハードル越えまで更に「4名」が必要です。

今回は作品欄別のブロック編集とせず、五十音順の掲載となります。年鑑というより合同歌集としての趣となります。

この継続企画は、毎年一定額の余剰金を生み出しおり、毎年それを冬雷運営費へ繰り入れております。

参加することは、結果的に冬雷運営費への寄付を行うこととなります。ご協力賜れば幸いです。希望を込めて参加申込みの締切を四月十日に伸ばします。

《事務局》

二月号作品二評

井上 萱子

先導の男性ガイドは七十五歳若者の如く軽快に歩く 川上美智子☆

筆者も同じ時期に、姫路城淡路島に旅をしたので、親しみを感じた一首。若者のように軽快に歩くガイドが居た。同じ人だったかもしれない。

ばあちゃんもみじがきれい早くきて見てごらんよと長男が言う 早乙女イチ☆
長男の言葉がそのまますべてを語っている。もみじの美しさ、長男の優しさ家族の温かさ。普段着の言葉が錦を詠む。

師走とは思えぬ陽気に窓を拭くうでまくりして汗ばみながら 川俣美治子☆
季節外れの温かさについて奮闘してのガラス磨き。「うでまくりして汗ばみながら」に、いきいきと場面が見えてくる。

十年間我に添ひたるパソコンの起動に十分がんばれ頑張れ 松本英夫
十年も使ったパソコンは、大切な相棒であり同士のようなもの。起動に時間が

かかることを励ます結句にみる人間性。夏シャツを正座して畳む六畳間窓より入る風のさはやか 大野 茜
畳の間に正座して洗たく物を畳む光景は、今では懐かしいものとなった。生活様式も考え方も変わる中で、日本の心をきちんと守っている姿勢が見える。

暖かき秋の日差しをあびながら茶を飲みており干柿ひとつ 豊田伸一☆
干柿ひとつを食べているとは言っていないが、干柿で茶を飲んでいるのだろう。のどかでゆったりとした気分が癒される。

空き家なる庭に咲きたる冬薔薇人住みし頃のはなやぎ思ふ 吉岡松世
空き家に残ったばらは、数は少ないかもしれないが、冬は色が冴えて美しい。人が住んでいた頃は花も人も多く華やいでいたという。歳月の過ぎ行きへの哀感。雨降るの予報に玉葱苗を買う今日売り出しのよき苗のあり 児玉孝子☆

野菜苗は植えた直後に雨が降れば活着によい。予報を知って買いに行くと、今日入ったばかりのよい苗に出会えたとい

う、淡々と詠みながら喜びが伝わる。特別拝観の光明寺の若き尼僧は花手水鉢優しく整える 加藤富子☆
手水鉢に花が浮いているのだろう。それを整えるのが若き尼僧であるために、優しくも美しくも媚やかにも見える。

掘り立てを湯がく落花生は旨いぞと昨日夫の掘り来てくれる 藤田夏見☆
妻の女子会のために夫が掘ってくれた落花生のようだ。夫の大きな愛情に包まれている日常が見える。上の句がそう言っている。

わが友は朝日・読売・いばらきの「歌壇」切りとり会う度くれる 小嶋知葉☆
友人も短歌に興味をもっているのだろう。三紙も購読している友も凄いが、毎回切り抜きをしてくれることもすごい。新聞名を個別に挙げて現実感がある。

丸坊主といふがの姿街路樹の剪定終へて立ち並ぶ幹 江藤ひさ子
定期的に剪定される街路樹。主幹のみ残し枝を切られた姿を、丸坊主と見ている。何本も立ち並ぶと異様な光景だろう。

二月号作品二評

江波戸愛子

咳ばらひ一つもあれば気づくものを狭き歩道を追ひ越す自転車 梶尾栄子
後ろから来る自転車に気付かずヒヤリとした方は多いと思う。自転車は狭い道も走れて便利だが事故も多い。その時に感じた恐怖を詠んで共感を覚える。

青空に白鷺舞い立つ姿してなんと美しき姫路城かな 川上美智子☆
優美なる白漆喰は伝統ある土佐漆喰とぞ聞けば驚く 同

一首目、姫路城はその姿と白さに白鷺城とも言われている。青空をバックに立つ姫路城の美しさに魅せられている作者の姿がみえるようだ。二首目は姫路城の白漆喰が作者の住む高知県の土佐漆喰と知ったときの驚きと喜びを詠む。

息子達に反対されつつ決意する最後と思う免許更新 卯嶋貴子☆
前の歌に八十歳とあるが運転に自信があるのだろう、買い物に必要なのかもしれない。

れない。息子さんたちの反対する気持ちも作者にはよく判っている決意なのだから誰にも止められない。新しい免許証を手にした作者がみえるようだ。

リズム合ふ友と生きてく心地良き気遣ひいらず何でも吐露す 植松千恵子
この歌に「友達は一生の宝物」という言葉を思い出した。作者はリズムの合う友と巡りあった喜びを、そして何でも吐露できる友を得た喜びを詠む。

日が落ちて寒さが急に近づけばくしみひとつストーブつける 川俣美治子☆

初冬のころだろうか、浴びていた日差しがとどかなくなつて急に冷え込む季節のようすが下の句によく判る。

三十代夢中で励みし本社ビルの跡地にマンション日暮に見上ぐ 大野 茜
働いていた職場はいくつになっても懐かしく想い出すことがある。作者が若い頃に夢中で励んだ本社ビルのその跡地に建っているマンションを見上げながら其の頃の自分をみているのだろうか。

新聞の「このゆびとーまれ」の友の顔やさしい眼差しあの頃のままだに 吉岡松世
毎回違う人が載る新聞の企画なのだろう、今日はしばらく会っていない友だったようだ。その友の顔や眼差しがああ頃のままと詠んで懐かしく想い出している。

嬉しきはオンラインよりオフ会の横顔見ゆるリアルな詠み会 藤田英輔☆
結句の詠み会は歌会だろうか、顔を見ながら、声聞きながらが一番嬉しいと詠む。

染め上げた髪は明るい栗毛色明日逢ふ友に心華やぐ 佐藤幸子

気持ちのよく判る一首です、この歌を頷きながら読んでいる人は多いと思う。明るい栗毛色がいいですね。

柿の実を初めて見たといふ異国の人に庭に生りたる柿を渡しぬ 齋鹿ミヤコ
日本語でありがたうと礼を言ひ我が家の柿を貰ひてくれたり 同

柿の実を食べた異国の人の反応はどうだったのだろうか、いろいろな理由で来ている異国の人は日本語をわかる人が多い。

作品二

視線を凝らす

小林 芳枝 東京

ぼんやりと家具の縦線見えながら翳みて見えぬ右目の範囲
右の目は難儀な手術になると言ひ迷はぬ医師に我も迷はず
手術室のちひさな台に固定さる頭と胴と足と膝まで
目は開いてゐる筈なれど感覚のなき視野は黄色みがる明るさ
一点を見つめつづけて動かずに居れば足先まで固くなる
耳近く低く聞えてくるこゑは「ああムズカシイ」とふたたび三度
左上の光り激しく動く間も視野の一点に視線を凝らす

梶尾 栄子 兵庫

日記帳綴る意欲は三年が頃合ひと思ひ購ふ師走
若水と洗米供へぬ神仏へ一人住むわれを守りたまへと
とんど焼きの準備着々田の中に青々と竹のツリー立ち上がる
高枝に残る柿の実に鴉群れ三日見ぬ間に喰ひつくしたり
晴るるとの予報はあくまで予報なり切り干し大根乾かぬままに
女男見分く基準はあつて無きがごと髪髪の長さもその振舞ひも
冬の日の暮るるは早く帰る娘の尾灯見送る角曲がるまで
興したる会社委ねて逝きし夫彼方より見てゐむ子の仕事ぶり

本間 志津子 山形

能登沖の断層なせる震度7漬るる家家裂けたる道路
襲ひくる津波に火災次々と避難する他なき人々よ
行き場なく避難する人らに容赦なく断水停電寒さが迫る
黙禱に始まる神戸の慰霊祭117と竹筒並ぶ
竹筒の切り口にあかりさゆらぎて「ともに」と添ふるあかりも見ゆる
今日よりは小中学校始業とぞかの日よりすでに三週間経つ
停電は一月末に断水は三月末に解消と聞く
復興を目指す人らのこれからの長き道のり真幸くあれよ

佐藤 靖子 東京

訃のしらせといふに差出人の名の嬉し手紙送るも遠慮あるいま
「ごようのたからをもつて」治れしうとめにあやされ娘二人育ちぬ
「ごようのたから」は「御代の宝」子は世の宝と姑言ひき
空色のビーズの小さながまぐちがにぎり福いつつの坐処となりをり
裏門に墓地より人の現れて礼をしてより去りてゆきたり
大宰府が画面に出でこずザダイフと入力せるを気付くがおそし
龍の像五体を祀る神様に人らつらなる真面目な顔に

鈴木 計子 東京

前の日の寒さ思ひて貼る懐炉けふの日差しに少し汗ばむ
能登地震の無事を言ひ来る電話あり透析長き友のこゑにて

おだやかな日差し広がる青き空被災地能登にああ届けたし
来週は抜かるる前の歯つねのごと歯間ブラシ使ひてみがく
風強く自転車押しゆくこの先にビル風強き交叉点あり
立ち位置を示すシールのなくなりて押されてをりぬエレベーターに
コーラスが又はじまつたと子が言へり犬飼ふ家の近所に増えゐて
ありがたう言はれて幼き頃の子の言葉に返すどうもしまして

東 ミチ 青森

朝ドラの「ブギウギ」は吾が少女期の戦争の記憶兄への赤紙
猫と吾の冬の生活のひと月の灯油量は二五七リットル
スパーに平たい形のキャベツを見つけ漬物にせむと塩鮭も買ふ
キャベツ三個に塩鮭の半身を混ぜて漬け込む一斗樽に
人生の最終の路に佇みながら僅かながらの計画を組む
断捨離に残し置きたる和箆筒の中身は茶の湯にいそしみしもの
夢路より覚めてつぶやく母さんあなたの年より丁度十年越しました
子の供養の朝ごとの経のお勤めも三十九年目なりまだ続く

益坂 順子 福岡

近隣にはしやぐ子供の声響くこの冬初の雪舞ふ朝
通園のバスを待つ間も子等笑ふ少し積みたる雪を集めて
講演の「健康長寿ノススメ」といふ題の導く外出機会
大ホールの八割程を埋めたる年齢高き社会の縮図

久々の鶴屋百貨店に待ち合せ颯爽と行く人を見てをり
何もかも気おくれしたる我なればウィンドーなど見ずに歩めり
わが街のデパート閉店されてより二十年の時の過ぎたり
ひたすらに歩くのみなる山登り街行く疲労の比較に非ず

早乙女 イチ☆ 栃木

高高とのびたキンカン枝を切り家の中にもぎとりをする
今朝もまた地面におちた柚子ひろい家の中へと持ちてくるなり
菜園にねぎだけ植えてこれからはなにを植えるか考えてみる

卯嶋 貴子☆ 東京

救急で入院したる夫を病院に残して帰る厳寒の一月
面会は二人だけなり感染症対策に厳重な十五分間
栄養師の食事の管理の説明を受けて帰る道に凍る月昇る
世の中に不条理なこともありすぎる殺し合いはもうやめて
白梅が満開になり小鳥たち次々と来て花を啄む

安川 敏子☆ 埼玉

シクラメン白は寒いと赤にする今年は近くに豆蔕く声なし
はつきりと耳元で呼ぶ母の声「ハッ」と眼覚めてその後は聞けず
雪の朝滑って飛んで頬から落ちて出血多く鬼女に変身
去年から三度転倒やっと思ふ今の自分の身体能力
暖かい部屋に花あり香り満ち笑い声なく外灯を見る

大切なノートどこにも見つからず記憶もなくて終日捜す
顔の怪我通院十日医師は言う「内出血は三十日で消える筈」

大野 茜 神奈川

自転車に乗り始めた男の子倒れて見上ぐ母は微笑む

デパートのパン屋は本店ミラノとか十年通ふも変はらぬ行列

日本橋の高層ビルの路地裏に稲荷祀らる柏手を打つ

廃屋の取り壊されて白壁の三階が建つマジックのごとく

四年振り芝公園の更科に集ふそば好きメンバー欠けず

登記書き換え

永野 雅 子☆ 東京

生前の父より受けた鞆から土地の登記書探し出したり

持ち家の名義書き換え手続きを紹介されたる司法書士に依頼す

初対面の司法書士には同世代と覚しき白髪のある安堵す

登記済み金額聞けば土地評価の高き所にわが店は在る

新しき登記書届きよく見れば重みのあらぬ今の書式は

川 上 美智子☆ 高知

歌の友と落ち合う駅は後免駅「ごめんな祭」なる祭りのある町

言えなかった「ごめん」を舞台に大声で叫ぶ会場笑いに包まる

やなせたかし発案の「ハガキでごめんなさい」大賞は天国の祖母へ

弁当揚げ運動会に來た祖母を冷たく帰しし少年の日を詫ふ

東大寺の大仏特別拝観に並ぶ参道年越しの初詣

参道の賑わう人等のざわめきを包みて響く除夜の鐘の音

観相窓の開け放たれて大仏様のお顔にまみゆ新しき年

加藤 富 子☆ 栃木

紅白の鉢植えの梅咲きくれば早春賦のメロディ口ずさみおり

昨年に訪れし能登半島復旧の映像に笑顔増えゆく

一日も早く日常戻るように小銭を入れる募金の箱に

ガラピシャドン雨戸あく音が毎日の目覚ましとなるお隣さん

積もりたる雪を見ながら車の使用厳禁と言う娘と孫が

立春をすぎて現れる低気圧雪景色の庭を黒猫通る

今月の娘からの便りにはコロナ感染後遺症あると

吉岡 松 世 愛知

小春日の幸せもらふ散歩道赤塚山のどんぐり拾ふ

母さんが亡くなつてもう七年といふ人の背に温とき陽射す

レモン色のこの指輪いつ譲らうか貴き未来を守る黄玉

雪の日は「孤食のグルメ」おかずにし夫婦二人で夕食を食ぶ

おとなりは三つ違ひのお姉さん次郎柿持ちて裏口より来

街の息吹

松本 英夫 東京

空つぽの頭をふれど出てこない更地に建ちし家屋のかたち

高高とシートに囲まれかんここん木造家屋の柱立ちゆく

土地いつばい三階建ての民家建ち小学校のさくらの隠る

東京の雪にはしやげる子らの上になほもふれふれ白き光よ
釣り堀のこぼたれ瓦礫となりゆきてゴロゴロゴロリダンプに積まる
海面より低きこの地に今日もまた驚く高値のペンシルハウス建つ
この町にマンションの増え地下鉄の増えるホームに人満ちるらん

小嶋 知 葉☆ 茨城

故郷の復興支援訴える岡田直樹議員は声をふるわせ

新聞に掲載されたる十名の見事さに驚く読書感想文

「二冊から広がる世界」と書かれたる感想文に読書の深さを感じる

誘われドラマチックコンサートへプロの歌声心にしみる

鎮魂歌「会いたい」歌う沢田知可子能登に向けてとしんみり言えり

嫁さんと娘の動くお正月「お母さんはすわっていてね」と

はじめての腰痛味わいおろおろと子ら帰りたる一月五日

松居 光子 三重

外出先に昼餉とらむと入るカフェにアクリル板の復活しをり

コロナの感染増えて来たるらし気を緩めずに対策をせむ

七回目止めておかうと思ひぬしワクチン接種の予約をしたり

デパートにロングコートを探しをれば「着てみてください」と声をかけらる

三着を試着してみても似合ひたるはローズがかつたベージュのコート

やはらかな色合ひのコート身にまとひ立春近き日お稽古に行く

新聞に日の入り一分伸びること日日確かめて春を待ちある

三好 規子 神奈川

微熱いでコロナ・血液・CTの検査うけれど原因不明

熱とれず整形医は内科と言ひ内科医は骨折の所為とふただ寝ぬるのみ

能登地震に神戸の震災よみがへるあの日全壊の古里の家

大阪を朝発ち夜つきし父母の須磨くづれる高速道や火事場を避けて

父の字の張紙みつけ安堵せりバッグの板チョコ夫と分け合ひき

浮き出づる月下美人の表紙絵に父を思へり年とし咲かせき

月下美人の萎れたる花を持ち帰り酔の物つくりき留守居の夫に

野口 秀子 山形

ばあちゃん元気だね十五の男孫に言はるるは何故か淋しき労はられてる

しとやかな湯浴みの姿に見入りたり赤湯の宿にやまとなでしこ

真夜中に着陸したるSLIM乗せ水色の空に弦月昇り来

雪にかすむ夕暮れに大き月昇るピンポイント着陸のSLIMは如何に

この夕べ干物ののだごろふんはりと焼きたて盛り付く電話が入る

山新歌壇の井上菅子氏の歌評に納得をしてゐる立春の朝の清しも

同年代のセールスウーマンはしなやかにペレボルサ財布の若草色を勧め来

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

聞かずとも入院先の評判の良きを語りて呉るる運転手

抗菌剤三秒ごとの一滴を受けて始まるベッドの上に

看護師らの廊下に話す声とどく明るく軽く楽しくありて

廊下より言葉はつきり聞こえる今日の担当看護師の声
咳と胸の痛みをさまる抗菌剤副作用の筋肉痛を残して
筋肉の痛みの続く腰腹部ゆつくり動けどそのたび痛む
水分を含みて漬るるご飯なれど入院の七日残さず食す
粒のあるご飯食べたしと看護師に伝へて得たる退院の許可

西村 邦子 兵庫

木造の小さな学舎米糠で磨かれ廊下はつややかかなりき
校舎の軒に吊るされし釣鐘が授業の始まり終りを告げき
うす暗い印刷室の硝子戸を開ければ広がるインキの匂ひ
刷りあがる文字の濃淡確認しつつゴムのローラー息整へて
好奇心ありて魚の内臓も臆さず捌く十三歳は

包丁を祖父に譲られ一人立ち皿に並べる鰯の刺身を
包丁の研ぎ方教はる男の孫の後姿は夫を越ゆる

内垣 米子 千葉

冷えしるき未明の空に瞬かぬ金星ややにまたたきてをり
ハイネックセーター着たる鏡の顔あらまあ描きたる眉が剥けてる
さらさらと整ふ人の前に立ちかすかに兆すかなしみは何
さんぴらを煮つつ「冬雷」読みをりて唐辛子の香の喉を刺激す
「さやうなら」「サヨナラ」などと言ひてみるそんな日テレビのリモコン壊れつ
細くなり薄くなりたる髪の毛よ梳きにし母の髪の毛に似て

二月号 十首選

作品一 石渡 静夫

幸せは願えば必ず叶いますそんな本閉じ眠り
につきぬ 野崎 礼子☆
自転車の入る広さに門があき今日は旗日と次
男が来たる 田中 祐子☆
みつかりたる母の上衣を抱き締めて部屋内歩
くただ嬉しくて 石本 啓子☆
隣家の稲刈り終わり小雨降る機械も人もくつ
ろげる雨 松中 賀代☆
昨日の自分をリセットしたくって起き抜けの
鏡に笑いかけてる 本郷 歌子☆
裏通りのビルの谷間の古本屋おずおず入れば
猫が寄り来る 永光 徳子☆
白妙の佗助あまた咲く庭に待ちみし雨に増せ
るいろ艶 戸部田とくえ
何年も会ってはいない葉書だけその後もまた
会うことはなし 吉田佐好子☆
師走とておのれを追ひ込むこともなし「やる
事リスト」の項目減らす 鈴木やよい
同時代生きてお金があらうとも買はぬだらう
とゴッホの絵を見る 中村 哲也

作品二 大塚 亮子

ゲームなら一を聞かずに十知る子勉強ならば
十聞き一知る 佐藤 靖子
看板に偽りありと独り言つ松前漬の数の子の
数 梶尾 栄子
隣にある幼稚園は今日も静かなりインフルエ
ンザの勢い増して 卯嶋 貴子☆
夏シャツを正座して畳む六畳間窓より入る風
のさはやか 大野 茜
暖かき秋の日差しをあびながら茶を飲みてお
り干柿ひとつ 豊田 伸一☆
寒き朝雨戸を繰れば光あび黄に点れる石路の
花 吉岡 松世
旅したる娘の土産に添えあるは出雲大社の長
寿のお守り 児玉 孝子☆
畑より今朝採り来たる大根で鰯を作るまるま
る一本 佐藤 幸子
歌を詠む細い流れをたどりゆけば五年生の文
集作り 西村 邦子
柿の実を初めて見たといふ異国の人に庭に生
りたる柿を渡しぬ 斎鹿ミヤコ

作品三 天野 克彦

あしひきの山は安達太良 光太郎詠む詩なん
ぞを口ずさみつつ 新井 光雄☆
五百日後の万博もこの友と行く半世紀前も共
に歩みき 小田原禮子
絹の布をひと手間かけて絞り染め紅花の色い
まもあざやか 水澤タカ子
ペランダに下げたる干柿を訪ね来る友のほめ
ゆく八個ばかりを 佐々木政子
韓国語話せぬ吾に助けあり自動翻訳にカムサ
ハムニダ 高藤 朱美☆
久しぶりの神保町の古書店街店の名変わり店
主も変わる 立石 節子☆
富士山と都心のビルが同居するごとく見ゆる
は新鮮にして 井出 祐子
半年前座席譲られたる常磐線笑顔の力士は
「友風」なりき 塚本 節子☆
冬雷の大会初に参加する一日掛かりで仲間と
学ぶ 後藤 恭介☆
ザクロの実熟れてパツクリ赤い実がたわわに
実り心がおどる 永井 享子☆

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記のテーマによる原稿を募ります。

記

●島木赤彦の一首鑑賞

皆様が赤彦作品ならこれを選ぶという一首について自由にお書きください。

●先ず作品一首を二分分でお書き頂き、その後に、

*本文 25字×17行

をお願いします。末尾にお名前を入れてください。

●締切日は、毎月15日とします。

*尚、掲載について細部はご一願います。

●宛先は編集室（大山まで）手書き、メール添付どちらでも可。

《編集室》

二月号 十首選

冬雷集

益坂 順子

二月集／残響集

山口 嵩

夜の月光ガラス戸を通して入り来て部屋に電灯つけたる如し 兼目 久

主なき家の建ちをり花が咲き優しき蠟の笑顔伝はる 有泉 泰子

衣替へためらふ陽気先延ばし遂に師走も未だ動きなし 中村 晴美

寒暖の差の著しき日にちに苺の苗は実花付けたり 青木 初子

恩師への思ひなどなど湧くほどに「そこ」は鮮やか「きのふ」はおぼろ 山口 嵩

共に住む難儀知るゆゑひとり身の娘に特に助言はしない 高橋 説子

月に一度日々起こること細ごまとうわが反省と兄に知らせる 大塚 亮子

久々に観る浅間嶺の存在に立ち尽くし観るしづかな鼓動 嶋田 正之

灰色の冬の浜辺も楽しかり熱き茶を手にアザラシを待つ ブレイクあずさ☆

名勝のうづ潮渦を巻かぬとき安息に似る潮の輝き 井上 菅子

落葉の進む鞍岳中腹に思はず伸ばす手に冬苺

赤赤と沈みゆく日を追ひかけて中空をゆく半

月白し 本間志津子

艶やかな丸き栃の実下生えの草に落ちるる峠

の古道 小林 貞子

夏を耐へ今咲き誇る桃色の薔薇に優しき初冬

の光 須藤 紀子

帰宅せぬ猫は今頃何処にいる食器に餌と水は

そのまま 石渡 静夫☆

じんわりと日に日につる腰痛に難儀ふえゆ

く和式トイレも 内垣 米子

澄んだ空公孫樹の並木どこまでも黄葉が舞い

散る小犬が走る 安川 敏子☆

日かけて 松崎みき子

祭り終え出店の野菜と菊鉢を共に直売半額

セール 越澤 太朗☆

サックスを金属ねじ曲がり尺八と大まじめに

呼ぶ時代を知りぬ 片桐美穂子☆

二月号 十首選

■島木赤彦の一首鑑賞 2

わが室に子ども騒げどもうるさからず物書きとほす
元日二日 島木赤彦『氷魚』

大正八年「冬の雨」より。歌人としても教育者としても力を発揮し続けた赤彦の家庭での姿が温かく伝わる。飾り気のない実直な表現の中に生活が滲み出ている。子どもは何か原稿を書いている父の部屋にも、お構いなく入ってきて騒ぐ。子からすると父との距離が近い。父は子を叱ることなく、その空気感の中で書かねばならぬものに向かい筆を進める。歌集では目立たない一首だが、人間赤彦の人の温かさと執筆への情熱が伝わる。

『冊子を作る』に収録された大山敏夫氏の「島木赤彦掌論」はその作品を通して赤彦の生き方に触れている。興味深いのは伊藤左千夫亡き後、遅刊休刊の続いていた「アララギ」を単身上京して完全復活させ、繁栄の基礎を築いたことを述べた箇所。編集発行人として尽くす一方で長野に戻っては「信濃教育」の編集主任も務めた。この一首には多忙な日々の家庭での一駒が見える。

《桜井美保子》

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

●投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）

●本部事務局

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

江戸川大学 高橋 克 研究室内

☎ 〇四（七一二）〇六六一（代表）



二月号作品三評

桜井美保子

あしひきの山は筑波よ高校の古文の教師が万葉語る 新井光雄☆

高校時代の古典の授業での回想。現在形で表現に作者らしさがある。万葉集の中でも筑波を詠んだ風土色豊かな東歌は、庶民の心情が込められていて魅力的である。教師の情熱と作者の熱い心。

百貨店体温感知機今なきに無意識に立つ五類になりても 小田原禮子

コロナ禍の時は病院でも百貨店でも体温感知機が入口に備えられていた。その習慣が身体に染み込んでいて消えないのだろう。感染防止に心を砕いた時期が如何に長かったか。結句に納得する。

午前四時杖つく母は見送り呉る団体バスの無事を祈りて 谷田律子☆

団体バスの旅行といえど、たまに事故もあり心配である。夜が明けないうちからのバスの旅。無事を祈って見送つてくれる母の優しさ。心温まる作品だ。

二月号作品三評

橘 美千代

いちやうの葉ベランダに二枚貼りつきぬ避難梯子の点検受くる 小田原禮子

一見異なる事象の並列であるが上の句が下の句の結果となる。本来下の句はベランダにかかる形容詞節であろう。避難梯子の点検を受けるためにベランダに出たところから飛んできてベランダに貼り付いた銀杏の葉の鮮やかな黄色が目につく。配列を変えて印象的に。

絹の布をひと手間かけて絞り染め紅花の色いまもあざやか 水澤タカ子

山形県の県花である紅花。『源氏物語』に登場する女性のあだ名の末摘花は紅花のことである。染色にも用いられ、摘み取った紅花を発酵し乾燥させた花餅を使い冬に染めるという。技と手間をかけて染めた色は時がたっても褪せず鮮やかなまま。作者の満足感と遊びが伝わる。

名月が満月なるは七年後生きて又見む 今宵の月を 奥山清子

勿体ないを心がけつつ暮らしたし曾孫たちの未来を見据えて 水澤タカ子
上句に作者の生き方が感じられる。確かに勿体ないという思いは物に対してだけではないから、そう心がけてゆくのは良いことである。その姿勢は未来ある曾孫さんにも受け継がれるだろう。

韓国の息子家族が来日し夫の墓にて長く手合わす 高藤朱美☆

韓国に住んでおられるご子息がご家族と共に日本に來られてご主人のお墓参りしてくるのは嬉しいことだろう。結句の「長く手合わす」に心の籠ったお参りの様子が出てくる。

高校の同級会は十二名静かに始まり二次会はお茶 立石節子☆

女性ばかりの会だろうか。あまり騒ぐ人もなく静かな集まりらしい。二次会もお茶というところに年齢層が出ており、楽しい時間を慎ましく表現している。

半年前座席譲られたる常磐線笑顔の力士は「友風」なりき 塚本節子☆

車内で席を譲られるのは有難い。しか

二〇二三年九月二十九日の中秋の名月は満月と一致した。望月はひととき明るく輝いていた。次に名月が満月となるのは七年後だという。作者は希望と祈りをこめて歌う「生きて又見む」と。真情の籠もった心を打つ美しい句だ。

故郷の祖母の使いし竿秤幼き頃につけた悪戯跡 山崎 猛☆

今はほとんど見ることもない竿秤だ。昔市場で野菜や魚を測っているのを見た。祖母の竿秤を手にして昔日がよみがえり懐かしさが胸に迫ったことだろう。悪戯につけた跡もしっかり残っていて。

富士山と都心のビルが同居するごとく見ゆるは新鮮にして 井出裕子

静岡に住む作者が東京に来て八王子にある高尾山の山頂から富士山を眺めるといふ。静岡から見る富士山とは違った眺め。「都心のビルと同居するごとく」という描写が他になく新鮮だ。

喪に服し賀状に追はることもなく穏やかにして師走迎へたり 羽田孝輝
年末になると毎年、賀状書きに追われ

も譲ってくれる人が笑顔であれば嬉しいものだ。その人は力士「友風」、微笑ましい場面が読者の眼に浮かぶ。

熊たちが生き抜くことの厳しさは人間どもに比ぶるもなし 羽田孝輝

人間の住むエリアに熊が侵入すると、様々な被害が発生し熊を駆除することになる。しかし、これではよいのかという疑問が作者の心底にある。山の自然環境が変化し、生きるのも厳しい熊たちのことを考えさせられる。

由紀さおりは艶ある声で童謡歌い記憶たぐりて会場なごむ 笠岡文子☆

誰でも子供の頃は童謡に親しんだ。コンサートで由紀さおりが歌う童謡に会場が和んで行くのはその歌声を聞きながら幼い頃を思い出すからだろう。

日光の土産店にざわめく小学生修学旅行のバスを連ねて 後藤恭介☆

修学旅行で日光を訪ねた小学生。楽しみの一つはお土産を買うこと。一首はバスを降りて友達と話しながら買物する様子を温かく捉えている。

て大変な人々が結構いると思う。何でもこんな苦勞をしなければならぬのと。喪に服しながらも賀状書きから解放されて穏やかに過ごせたという作者。なにか気がひけるが。その感じよく分かる。

願ひ事五つも有りて拝殿の見えぬうちから祈り始める 金子八重子☆

作者のお人柄がしのばれるユニークで楽しい歌だ。願う方は必死なのだろう。五つもの願いごとを抱えて。

千光寺登り来たりて石段を汗して見れば尾道の海 首藤文江☆

気負うことなく順直に詠まれていて惹きつけられる歌だ。二つの地名が一首の中で印象深く効果的だ。特に結句の「尾道の海」は輝く海が目に見えるようだ。冬空の夕焼けをゆく飛行機雲山に向って幾すじもあり 永井亨子☆

飛行機雲を見上げる時に人はしばし心を解き放つ。冬の夕焼け空を突き進むかの飛行機雲。山に向かって弧を描き幾すじも伸びていく様は壮観でもある。様々な希望を乗せてゆくかのような。

作品三

小田原 禮子 福岡

被災地にボランティア入る画面替へ雄の魚の口内保育に
介護の手増える姉住む施設宛て片手で穿けるソックス送る
コロナ禍に四年の月日飛び越せり二月の暦確かに閏
水道の水も温みて夕餉前流しの前に長く立ちたり
早めに鼻のフィッター加減しておけど今朝の陽気にマスクを忘る
徒歩三分食用油の小瓶買ひ博多港を少し歩きて戻る

横丁

新井 光雄 ☆ 東京

思い出の残る横丁「思い出」に時代はコロナ禍酒飲む男は
昼間から行き場なき老い連れもなく酒を片手に一点見つめる
今時は女が一人真昼間に酒飲む姿も珍しくなし
別名がションベン横丁あの頃は本当にそんな臭いしてたさ
横丁で学生飲めたは安焼耐熱湯で割り鼻をつまんで
革命など起こせぬことは承知すも自論に酔っては激論となる
余りにも幼なに過ぎた理想主義東京五輪もアベも無視す
火事ありて学生時代の店なくもあちこちからはあの日の喧騒

全共闘時代の直前緊迫の破裂の予感に苦き日過ぎる
八十路となりサルトル原書で読むことも時代の記憶の残り滓なれ

津田 美知子 岩手

冬雷の表紙の月下美人の花妖しさ儚さ絵より漂ふ
氷点下になりて動かぬ洗濯機朝の支度の順序を変へる
「よういどこらさ よういどこらさ」厚着する服手繰り上げ義母に湿布貼る
孫からの土産の守り札の在り北野天満宮の交通安全
運転の無事故無違反続く吾の車の窓に守り札揺る
能登の人よ衣食住全て我慢の時今日より明日は良くなる筈
能登の地震に過去の災害活かされて間仕切りテントに段ボールベッド

谷田 律子 ☆ 栃木

凍りつく大鉢の中に湯を注ぎ小鳥の為にとけるのを待つ
悲しい日我が愚かさに気づいた日一人野鳥に話しかけてる
手を清め口すすぐ水冷たくていそいでハンカチ出してぬぐいぬ
見上ぐれば暫くぶりのヘルクレス満月までも山頂近くに
北風の窓打つ夜は眠れずに芯まで寒い布団の中で
積もりたる雪が解け出しわが家の屋根から落ちるすさまじき音

奥山 清子 山形

貰ひたる「家の光」の家計簿に一日一首の歌を記さむ
「只子さん熊来ませんか」「昨日も来たよ」生家を守る甥の妻言ふ

四肢強く牛にも負けぬと言はれたる獣医の甥を癌は食ひ尽くしにき
荷の重き四十八代とふ古き家背負ひし甥は癌に逝きたり
日曜も「能登に居ます」とふ返事医療チーム率ひて吾子は
錦木に辰の形の氷柱下がる朝日を受けて朱色に透けて
雪の間に芽吹く露の臺二つ採り夕餉は炊きたてご飯に露味噌
予想よりすべて最良今日の運勢驕らず生きむ慎み深く

井上鈴子 山形

初詣の賑はひのなか甥ひとり兄と約束の土鈴を求む
休み終はり生家に鍵をかける甥兄よ年始は楽しかつたらう
突然に右眼見えぬと夫言ひて正月明けの医院に向かふ
斜め掛けの鞆の人を見かくれば兄と見紛ふ山大病院
山形は夫と出会ひし街なりて病院の窓に雪の蔵王山
入院の夫を残して帰宅する玄関横に煙草とライター
手術前の夫のメールはことごとくわれの心配雪の心配

立石節子 ☆ 東京

『さみどり』を讀みて想うは能登のひと別れの辛さ抱えて生きむ
「鬼は外」小声で唱え恥ずかしげ孫の成長見え隠れして
中学の同級生の版画には新大橋の文字は右から
満洲で敵からのがれ逃げ惑う夢で安堵し暫し眠れず
現代のピアノ曲にも感動す耳も心もついて行けずに

山崎 猛 ☆ 埼玉

寒き夜に娘逝きたる悲しみに見上げし空の上弦の月
雪降りて三方道路の我が家では孫も参加の雪掻きとなる
朝晩に散歩に誘いしエイミーの有難さ今しみじみと知る
十六年間犬と歩きし散歩道いまは自動車に折折通る
「冬雷」の赤彦文学賞の喜びに遠き信濃の歌が浮かびぬ
同窓会待つと賀状に來たる友の訃報を知りて涙ぐむなり

高藤朱美 ☆ 茨城

一輪の梅の咲きたる元日の地震と飛行機事故に絶句す
過酷なる大学ラグビー決勝戦みぞれと電と雪舞うグラウンド
突然の八代亜紀さんの訃報知る命日重なる老衰の父と
友の歌の「男前」みて湯豆腐にと帰宅し娘と夕餉楽しむ
ホテルにてすれ違うCAさん達の爽やかな余韻にランチ楽しむ
早朝の東の空に瞬きて冷氣に映える金星眩し

塚本節子 ☆ 茨城

この頃は電車やバスの料金をスマホに済ませ小銭の眠る
買い物や通帳送金にスマホ決済を覚えて嬉し七十五歳
何もかもスマホに頼る日日なれば失くしたる時の不安が募る
利根川の水面の波のきらきらと朝日を浴びて光やわから
年明けて母の忌日の墓参り日本水仙ひと束供う

帰省したる末の息子と墓に参る水仙の香に父母偲ぶ
かたことでしょうか「ママ」と言いし吾子もしも生あらば子の居る齡

羽 田 孝 輝 山形

舞ひ上がり簾の如くふぶく雪は煙となりて枯野染め行く
猫たちよ出たり入ったり構はぬが戸を開けたなら閉めて来られよ
暗き朝猫が布団に入り来るわが身ずらして体撫でやる
薄暗き布団の上に猫をりて足動かせぬ心地良き朝
通勤の電車でみんな新聞を見たのは昔スマホに見入る
雲の白白鳥の白雪の白わが目に染み入る真白なる雪
無沙汰せる友逝くを知り悔いる朝叶はぬ思ひ次々溢る
時もあり幾度も近くに行きながら無沙汰せる友の逝くを知る朝

首 藤 文 江☆埼玉

年ごとに減り続けている年賀状したためられる絆の深し
待っている春よ来い来い春よ来いみんなで呼びたい被災地に春を
底冷えにぬくもり求め夕食にだんご汁作る今日は大寒
冷える夜入浴剤入れ温まる温泉気分が旅へと誘う
足痛むわれに見舞いと手に苺何でも頼めとありがたき友
歩けずに気力をなくし過ぎつつ思う幸せは歩けることと

越 澤 太 朗☆茨城

遊歩道にカサコソ動く鳥の群れスマホに撮りてカケスと知りぬ

遊歩道矢印沿いに歩み来て観察口の小窓覗きぬ

会報の取材に来たる「観察の森」木漏れ日に手をつなぐ親子連れ

「観察の森」の水槽自然の中に銀ブナ二匹追いつ追われつ

梅園の木漏れ日受けて歩みおり一陣の風に暫し佇む

遅蒔きの二十日大根の「さくらんぼ」正月膳に彩り添える

後 藤 恭 介☆茨城

玄関先のパンジー・ビオラ花盛り厳しく寒き風に首振る

「デコピン」という名の犬を抱く大谷くん新チームでの活躍願う

変化する新宿駅の巨大猫三次元での映像リアル

久々の東京駅の人の列店と店とに迷う地下街

朝寒にフロントガラス凍りつき思い出すなり勤務の頃を

進化する百円グッズテレビに見て買いたい文具とキッチン用具

少しずつ日の伸びて温とき病院の待合室に冬雷を読む

永 井 享 子☆東京

ヒヨドリがキーキーと鳴く裏山のピラカンサの実少なくなりぬ

雪がやみヒヨドリ達が忙しく南天の実を食べつくしたり

青空をゆつたりと飛ぶ飛行機は海原に行くサメに似ている

カラス鳴くカーカーアウアウ聞きなれず何を伝えるか立ち止まり聞く

雪雲が遠くの山の上にあり時を置かず我家にとどく

梅一輪咲いた後に雪が降り解け始め他のつぼみもゆるむ

「イラストは〇と線との組み合わせ」コツを教わり〇描く練習
「電車だよ」「バイキンマンよ」「これはバス」我の下手な絵孫は信じる
わが町でテレビに映ったロケ店は人気上昇近寄りがたし

老眼鏡かけて昔の楽譜出すブルグミュラーは今も新鮮
動画にて模範演奏見てみるが華やかすぎる曲の装い
心身を緩めることが快眠の助けと知って歌帖を閉じる
ストレッチポールに背を乗せゆらゆらと脳を揺すれば歌生まれるか

(☆印は新仮名遣い希望者です)

歌集/歌書
御礼

編集室・佐藤靖子

■岡田美幸歌集『グロリオサの祈り』

令和五年十月十二日発行、四三三首を収めている。鋭い比喩を以て伝えたいことの核心に読者を近づけている。そこに展開する詩やファンタジーは決して甘くなく、ほどよくドライである。自分の情感をまとめる知の力を感じるのだ。次の歌が著者を知るのに丁度だろうか。「歌人集団かばんの会」「現代短歌舟の会」。

全身を書物の中に投げ打って本一冊にしたいのです
では様ざまの比喩の一部から。
我が道は独自の道と思ったらコンクリートで舗装されてる
網膜を焼くほど光る駅前のイルミネーション正しさのよう
新品の服を花瓶と言うために一旦花になってもよい
尽きず楽しめる比喩だが、次は「生きる」を感じさせる歌。
生きるのにいつから勇気が要るようになったんだろう掌に蟬

生きることイコール願いだっただころ冬まで長生きしたカブトムシ
歌作のこと。
くるしさのの〇に手を突っこんでゴソゴソぶるんと歌を取り出す
マザカルを上五にしようと思う日は疲れているな有給を取る
海が好きなのだろうか。そうであってほしい。
日帰りの旅の話をしなくとも海の匂いが残るサンダル
ヒョウ柄のバニーガールが住んでいるあのアパートに届け潮風

題名の歌。

グロリオサ祈る両手の指ほどき掴みたかった言葉のあいだ
仕事や恋の読みごたえある歌からも三十三歳の才能に鼓舞される。

(株式会社コールサック社刊)

■黒田初子歌集『メルヘン通り』

令和五年十月十七日発行、六〇四首の第一歌集。足立区生まれ、遠く西北西に山脈が見え、南側には富士山、街や後楽園球場の明かりなど、視野広く育った著者は遠くへ行きたい願望が育って、そういう人らしい国内外の旅行が一つの生活として組みこまれた歌集ができた。まずは旅行詠から。

水球と呼ばれる星が窓の外青の濃淡うっすらと見ゆ
旅に来てシャクシャインの名を知りてやりわが心うちざわめきやまず
黒き服まとった女が木の枝でヤクを追いく菜の花の村

旅も短歌も長く勤めた市立学校給食センターを退職してからのようだ。(在職中には日本大学家政学部通信課程を卒業している)。仕事の歌から。

一人やめまた一人去り同期生は皆さりゆきぬ二十七年
三角巾きりりと被れば別の顔鏡の中から我を見ており
仕事をやめたことを人生休暇という著者の普段の生活から。
くらぶれば職ある頃の休暇とは少し苦くてとても甘かり
青春にまた会いたくて思い決め一人見に来たW・S・S

足許に犬が加わりようやくに団欒となる二人の食卓
隣の林にビルが建つことになった。累々と積まれる木の骸を見るにつけ。
巨大なるシャベルで掘られる林跡地下の堀いかにし居るや

メルヘン街道は夫婦揃ってバスで巡った。同じ名の通りは目の前にある。かつてこの名のスナックがあつて。
メルヘンは通りの名にもなっていてタクシー頼めば「メルヘン通りね」

この本のタイトルの文字は夫が担当した。

(熾叢書No.101 風心社刊)

■「姫由理」合同歌集 創刊九十周年記念

令和五年十一月三日発行。昭和八年創刊の九十周年の記念集で三十四名が参加している。付記の年表の戦中戦後の空白など見るにつけ存続への苦労が思われた。一首ずつだが紹介させて頂く。創設者は碓登志雄。
四年目の時を迎へて今歌ふ「祝ひ日出度」も一味違ふ 相島 賢旺
心天食めばなつかし故郷のありし日の父とまうでし祭 碓 千奈美
うねりつつ緑ひろがる山なみの朝は親しや雄鶏の声 碓 弘毅
冷蔵庫の警告音に答へつつ更に詰め込む年の瀬の幸 伊藤 房子
七夕の色とりどりの短冊にひときは太き健康の文字 稲田 利子
佐賀国体選手の宿舍自宅開放区長の義父は社会につくす 岩田 章
嫁姑性格似たり千支ネズミ即断即決わが道をゆく 上野千代子
病む夫と二人で歩く散歩道密かに名付けろりハビロロード 江澤 幸子
外に置く古きどんぶりに水溢れその水澄みて梅雨の明けゆく 大串きぬ枝
ぬくぬくと陽をひとり占めしたらしき愛車の上の猫の足跡 小笠原玉緒

歌壇座標

利用者の予備軍なりと誘はれて介護施設をぶらり見学 黒田江美子
この国の医療も介護も産業に経済社会の只中にある
【森田 隆】「冬雷」十二月号「冬雷集」に掲載の八首の内二首をあげた。八首は、介護施設の見学に関わる作である。
前の歌は、誘いを受けて拘りなく施設の見学にでかけた作者と、時々アドバイスし合う友人の存在を感じさせる。高齢となり、世間が狭くなりがちな日常に、貴重な人間関係を持つ作者であると想像する。
後の歌、施設を見学して、「医療も介護も産業として位置づけられ、経済社会の只中にある」と作者の鋭い把握を詠む。作者は、経済原則に基づき運営される施設で、営利目的の達成と入居者の費用負担についても、種々考えるに至ったと思うのである。介護施設には、公的施設と私的施設があり、要支援、要介護等の入居条件があり、入居費、月額費もさまざまである。近隣の市の特別養護老人ホームは、いずこも三百人が

水害のち生ふる草いままでに無きものありて庭土おほふ 貝島 信子
パパママに連れられ来たるみどり児は自由奔放卓上はらふ 鎌田 秀子
今年かぎり終末ねがふ賀状多し八十路のわれも心ゆらぎぬ 川添 澤
爪の色よみがへりたる手をかざし見上ぐる空の青さあたらし 草野真理子
好天に恵まれ令和のお正月平穩無事をひたすら願ふ 郡司三枝子
パスポート出番無きまま三国を巡る旅なりEUとなりて 古賀留美子
百均に珍奇なものと出会へれば今日一日の幸せを得る 権藤 正一
子や孫の食べてくるるを楽しみに野菜作りを生き甲斐となす 紫村美津子
菩提樹の大樹の中を走りたる列車の長旅ロシアは忘れじ 葛浦 敏子
薄明の富士を静かに包み込む藍の宇宙に星一つあり 多 珂 子
人知れず冬の落ち葉をかきわけてそつとそおつと野紺菊芽吹く 田中 幸子
おふくろの味を所望と息のメール献立俄に思ひ巡らす 田中 亮子
冬山の黒文字の枝活けたれば枝先の芽は

朱墨の小筆 土井 敏明
水撒けば種は音して弾けをりかそけきもの散りゆく夕べ 中村佐和子
結婚も出世もしたいと娘言ふ出世石段登りはじめて 西山登喜子
脊振路に合歓の優しき桃色の幻のごとき花を展ぐる 二之宮紫峰
梵鐘の音色響きて浄土まで届くを信じ手合はせ祈る 萩原 史江
街明かり高尾山より眺むれば闇に光りて星空となる 華 子
四捨五入覚えた息子と話すとき小柄な我も「2m」となり 前田 房恵
煙突の並ぶ景色に魅せられて巡りし歩数は二万八千歩 麻 実 子
彼の岸のみ祖偲べば夕暮れの厨の窓にきつね花見ゆ 本告 文枝
定年後「雨風食堂」好む夫撮み楽しき日々の食卓 柳迫ちえみ
千年の楠の根元に竹めば吾ひよつこなりと青葉見上ぐる 吉原美恵子
我が家の悲喜こもごもを見てきたる義母の筆筒は部屋に静まる 吉本たつえ
添えられた姫由理の深い紅色が巻末を飾っている。 (オリビア印刷株式会社刊)

■「帆(HAN)」2024.2月 36号
二度目の紹介である。佐藤よしみ氏の個人誌。私も個人誌活動の楽しさを知っている。氏の頑張りには注目する。「帆」は新書判8ページで纏まるコンパクトなもの。表紙に使うような厚めの用紙8ページなので手応え十分。
いつものように自身の新作五十首と、琉歌に関する研究の二本立てである。「たそがれ」50首を見つめよう。
四半世紀を年賀状にて繋がりし友なりきその多くを知らず
空焦がすような夕陽に包まれて鎮もる海に向き合ってみる
俯きて歩みゆく癖持ちしまま石ころ多き坂くだり行く
友の死を歌い、生きてゆく自身の内面へ深く踏み込んでゆく美しい作品である。
傷つきやすい心のような果実なり部屋いっばいに香りを充たせ
結句を連用形で終わらせ、未定の時間が継続しているかの印象を持たせている。後書きには、啄木の言葉「政治上理想の結合なるべき政党が此国に於ては単に利益と野心の結合に過ぎぬ」を挙げて政治への不信感を漏らしている。 (編集室)

入居待ちという厳しい現実がある。

【橋 美千代】作者の年齢は不明だが、まだお元氣な方なのだろう。自身で介護施設の見学に行かれ、「予備軍」という言葉にも余裕を感じられる。もしも介護が必要になった際は家族の負担にならないよう準備しておこうと。見学されたのは民間の有料老人ホームであろうか。公的な特別養護老人ホームはどこもほぼ満員で、必要時に即入所とはいかない。因みに筆者は医師会の任務で介護認定審査会の委員の任期中である。高齢者人口が増加し要介護者も増え続け公的施設のみでは介護が追いつかない現状だ。民間に頼らざるを得ない。医療も産業だと一括りにするのは違うと思うが、介護は確かに今ビジネスとなっている。



歌集『さみどり』新刊

■海潮 1月号

(編集部選)
水桶を借りて汲み来て墓をあらふ深く刻まれし米吉の名も 大山 敏夫

■香蘭 2月号

(土井絃二郎氏選)
見えるもの見るものすべて美しと齢の老けて見えるこのごろ 天野 克彦
「何はともあれおかしな人生でしたね」と言いそびれし我が独り言つ 乾 義江
畑にて一本咲けるヒマワリは雨の中でも笑うがごとし 正田フミエ

■林間 3月号

(池浦 健氏選)
生まれ来る子の性別の分かる世ぞ若き夫婦は御雛様予約す 井上 慎子
威風ある教室なるに登紀子女史シャンソン歌手だと真紅のマント 新井 光雄

●交流誌最近号において、小誌掲載歌のご紹介を頂きましたので、ご覧ください。各編集部に厚く御礼申し上げます。

第45回 全日本短歌大会 応募要項

作品 応募料	用紙	宛先	締切	賞	選者	発表	表彰式
新作未発表 二首一組とし何組でも可 二首一組で二千元 (※講演聴講のみの方は当日千円) 定額小為替、普通為替、現金書留で作品に同封 B4判四〇〇字詰原稿用紙 右半分に、住所、氏名(よみがな)年齢、電話番号 左半分に作品二首		二組以上応募の場合は一組ごとに前記の通り記載する 〒141-0022 東京都品川区東五反田1-12-5 秀栄ビル二階 日本歌人クラブ全日本短歌大会係 電話〇三-三八〇-二九八六 令和六年六月三十日 必着		文部科学大臣賞・毎日新聞社賞・日本歌人クラブ賞他 今野寿美・黒岩剛仁・生沼義朗・菊池裕・佐田公子・ 高山邦男・田中成彦・山内頌子・和嶋勝利・結城千賀子 毎日新聞紙上、及び入賞者への通知による 応募者へは大会終了後、作品集を送付します 日時 令和六年十月二十六日 講演 北村 薫 先生(聞き手 藤原龍一郎) 会場 明治神宮 参集殿 渋谷区代々木神園町二番一号			

主催・日本歌人クラブ 後援・文化庁 毎日新聞社

日本歌人クラブ 会員 2000人 全国規模の親睦団体

短歌を愛好する方ならどなたでも入会できます。

昭和23年創立「歌人相互の親睦」と「歌壇の発展」のために活動しています。

主な活動

- 全日本短歌大会
- 会誌「風」(活動報告・会員の作品・他)
- 日本歌人クラブ各賞の設定
- 全国12ブロックでの大会開催
- 地域優良歌集の表彰
- 『現代万葉集』(1300名超のアンソロジー)

問い合わせ先

〒141-0022 東京都品川区東五反田1-12-5 秀栄ビル2F
TEL: 03-3280-2986 FAX: 03-3280-3249
ホームページ <http://www.kajinclub.com/>



編集 後記

▽今回七冊目となる『作品年鑑・合同歌集』は目標の参加人数まであと四名であるという。ぜひご協力いただければありがたい。一年間、冬雷に掲載された全ての作品が収録されるのだから、参加者が多いほどそれぞれの作者の個性が光る。まさにどこを読んでも面白い一冊になるだろう。

▽村上美江さんの歌集『さみどり』の評判が良い。東日本大震災で被害を受けながらも明るく力強く生きる姿に感銘を受ける。

▽自分の歌集を出したい人には幾つかの方法がある。冬雷で刊行するなら「冬雷叢書」「冬雷短歌会文庫」がある。いずれも編集から表紙デザインまで高い技術で制作されている。また出版社から出したい方もあろう。まずは担当者にご相談下さい。（桜井美保子）

▽最高気温が二十一度となった翌朝はマイナス三度という異常気象に見舞われた。体がついていけない。そんな季節に悪天候の日も元気に散歩している犬等がいる。みなしば犬だ。今朝も雲の中テンション低めの主人を引つ張ってやる気満々のしば犬に出会った。

▽アクリル板復活の歌があつたがコロナ感染が増えている。休日診療所の看護師の話が受診者はインフルよりコロナが圧倒的に多く子供はほぼコロナだという。五類とは自己責任でということだ。防御を考え直すべき。（橋 美千代）

▽昨年の収支報告書の概算が出て見る事になったが、赤字額に愕然とした。即効の対応など受け付けないレベルである。二〇一六年に似た様な時があり、対策として『冬雷作品年鑑・自選合同歌集』の企画を出したのを思い出す。この企画によって少し持ち直したものの、ここ数年に幹部会員の方の逝去や高齢による退会が目立ち、基本的

な会費収入が激減している。逆に、郵送費、材料費、印刷製本費等の値上げも頻発で斯かる結果となった。とにかく出来る事は実行し赤字補填へ努めねばならず、熟考中である。

▽歌壇総合誌も隔月刊へ切替わった所が多い。結社誌も同様なのは当然であろう。今年も郵送費を筆頭に値上げラッシュが予想される。現在の対策が効果的である保証はない。赤字を覚悟で一、二年データを作り真の方向性を見出したい。本号53頁に掲載した『作品年鑑・合同歌集』への参加者追加募集の事は、この編集後記の段階で残り二名の所にきた。間も無く達成の域である。短歌結社誌の運営は会費と寄付金の収入が基本なので協力のお願いをし続けている。打出す企画への参加は寄付金と同様の励みとなる。（大山敏夫）

▽二〇二三年作品年鑑は参加締切日が過ぎて目標の百名に少し足りなかった。この年鑑は毎年少しず

つ内容を変えながら読み易いように工夫されてきた。今回は作品欄を外して作者のエッセイを載せるという企画なので読物としても面白くなるのではないかと楽しみにしている。自由参加であるが多くの方にご参加戴きたいと願っている。

▽二回目となる「島本赤彦一首鑑賞」は桜井美保子さん。幼い子供の遊ぶ中で元日二日から執筆する歌から家庭人としての赤彦の穏やかな人柄がみえてくる。この欄は自由に赤彦の歌を鑑賞できる場なので是非書いてみて下さい。

▽復活して一年続いた本部例会だが街にはコロナ以外の流行も増えてきており暫く様子を見ることになった。残念ではあるが健康を大切にして戴きたい。（小林芳枝）

▽寄附御礼
桜井美保子

▽今月より月例会は中止となりましたので、予約取り済みの会場にて、『作品年鑑・合同歌集』の校正作業を予定しています。

編集後記

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、投稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
 - ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
 - 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
 - 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山 敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2024年4月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 049-247-1789
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒 価 700 円